續千載和歌集　上

特別
イ4
3163
16(1)

続千載和歌集巻第一

春歌上

立春の心をよませ給うける

前中納言定家

いつる日のおなしひかりによもの海の波にもけふや春はたつらん

嘉元二年百首歌たてまつりける時

入道前太政大臣

おさまれる家の代々の始にはたつ雲の上にそのしるしぬれ
[illegible]

法皇御製

百首歌よませ給ける時

二品法親王覚助

きえつくす花はそれともみえすして霞のうちに匂ふ白雲

花の歌の中に

津守国助

尾上の桜さきぬらし枝にかゝれる雲も花とこそみれ

正治二年三月歌合に

右大臣

[illegible]

南殿の桜を
[illegible]

左近大将冬教

ここの雲井の桜さかりなれは又さくはなの世をもしるかな

百首奉たてまつりし時

前関白太政大臣

百敷やうつしの花は人ありて柳の匂ふかな之

春をて花を

法皇御製

あかなくも青葉はれはさく花は千世の春をとおもひける

今上

いまこそみるの花の千世をとも待得し時に逢ひける

み吉野の山中の花

権中納言為藤

山河の氷もとけて春風にのこる水も流れ

弘長元年後嵯峨院に百首奉たてまつりし時

前大納言為家

立かへる春はきのふにかはらねと流や氷とけてそかはる色

常盤井入道前太政大臣

あさ日さす霞の衣はるの空たちかへりさくらもや春

土御門院御製

あさ山すやあさ日の松のたのみにも春の光そ見えける

順徳院御製

かすみの中の山の霞とけて春のきたりけり

鶯のたえしゆへなくなくをさへなく

郁芳門院安藝

鶯の鳴音やそれとまかふらん家の春こそかはりけれ
聞しらん

凡河内躬恒

春の立ことを鶯のいかにしてか鳴くこゑの先きこゆらん

三條右大臣家の屏風に

紀貫之

春立て谷のひかたまいつらむ里にひと(?)(?)見えし

千五百番歌合に

前中納言定家

山里は谷の鶯うちはふき雪よりいつるこその古こゑ

春の哥の中に

春山の峯のあさ日の春の色に谷の鶯こやおとるらん
従にかすみしく世の時うつるのふたつこゑの鶯の声
つらまるりの(?)はつのこゑおとる(?)海(?)そ(?)(?)

亀山院御製

谷ふかき梅の立枝に出つる鶯の鳴くさきにきこえまさらん
春(?)(?)しなと

今上御製

さえかへる風にた(?)(?)春の(?)の(?)のこゑの(?)(?)

百首哥よみ侍りけるに

法皇御製

家にてもさきちるなる梅花さけれ我身への春の風かな

建保四年内裏の百番哥合に　八条院高倉

常盤なる宿にもまたとゞめてし梅さく宿と見えぬ哉

題しらず　源道済

春きぬれは盛なるらし我宿の垣根の梅も見るへかりけり

延喜御時御屏風に　躬恒

梅の花にほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそ有ける

千五百番哥合に　惟明親王

あさ緑霞の風に匂ひきて花にこつたふ谷の鶯

題しらず　道因法師

梅の花にほひをさそふ風のまにやかて花の香[illegible]

正治二年後鳥羽院に百首歌たてまつりける時　後京極摂政前太政大臣

かすみ行春の風にもにほひきて雪とみるまて花[illegible]

宝治二年後嵯峨院に百首哥たてまつりける時に　前大納言為氏

よもの雪

雪ふかきのりの春日の野もこゝろもえぬ雪はきえぬ雪こそふりて

弘安元年亀山院に百首歌たてまつりける時

入道前太政大臣

あさみどりかすみそめぬる色は春かすむ山の色さへ雪ぞふりつゝ

春の雪をよませ給ひける

院御製

のどかなる花はさきぬやとそ春のみよしの雪はふりつゝ

伏見院御製

春くれはまつ雪の宿はわかれしもえさきぬ峯の山

二月餘寒といふことを

後二条院御製

みよし野は猶山さむし二月のそらも雪けの霞のおぼろよ

宝治二年人々に百首歌めされけるに

春の雪をよませ給ひける

後嵯峨院御製

春来ても猶こそ雪はあさ日影さすや岩根の白雪

住吉社によみてたてまつりける百首歌の中に

若菜を

前大納言為家

下もえやまついそくらん白雪のおきてはいそぐ若なつむ也

寛喜元年女御入内屏風に

常盤井入道前太政大臣

春くれハ袖よりうつれとけなくに雪ハ氷の色をそふらし

雪中若菜といふ事をよみ侍ける

法皇御製

袖の上にかゝる若菜をとりそへてはらひもあへぬ雪とこそ見れ

弘安百首歌たてまつりける時

入道前太政大臣

うれしさハ神もしるらん春日野の上に若菜の家のためしを

嘉元百首歌たてまつりける時若菜

太政大臣

行すゑハとふひの野への白雪のきゆるをまちて若菜をそつむ（摘）

鎌倉右大臣家の屏風に春日野に人の若菜つむところ
よみ侍ける

大中臣能宣朝臣

あさらけき春のくることにしるしとや若菜の野へにつみはやすらん（摘）
かれとゝめける

清原深養父

そのまゝにいさ春の野にわかなつむしかもむれつゝなれへ（なへ）ゆかなん（を）

弘徽殿女御歌合に

相模

春たつといふ日の野への若菜をハ日をかそへてそ立まちける

松上霞といふ心を

順徳院御製

思ひこそ世の霞そたつ高砂の松のあらしの音はかはりて

洞院摂政家百首歌よみ侍りける霞

藤原信実朝臣

たかさこの尾上の松のあさ霞それとも見えす遠さかりゆく

常盤井入道前太政大臣

さゝ霞立てしからに高砂の松の木の間もかすかにそみる

春乃哥の中に

前僧正道性

春はまた霞にこもる時しらぬ雪もみえけりふしの高山

寛治百首歌たてまつりける時山霞

前大納言為氏

あさ風の吹くる山のかすみにはたちそふ雲もさえかへりつゝ

百首歌たてまつりし時

前大納言為世

よしのやま霞の衣ほしにけり雪けの雲の色もわかれす

正治二年百首歌たてまつりける時

後京極摂政前太政大臣

ゆくらくら春の光にほのほのとやよひの月の影やかすめる

柳を

藤原信実朝臣

春はまつみしにかはりてすゝしき深山もとひさきの青柳の糸

前中納言定家

おもひやるかたそかすめる青柳の枝もたはゝに匂ふ梅かゝ

宿中梅といふことをよませ給ける

今上御製

宿やその梢の雪のとけしより風にしられて梅かをるなり

百首哥たてまつりし時

藤原為定朝臣

雪のうへにかゝるとみる梅か枝は風にしらるゝそらの春風

春哥の中に

九条左大臣女

吹まよふ風の梢の梅かゝに我袖ふれよ春の夕かせ

二品法親王覚助

香をとめてたれやとふらし我宿の梅のこ枝に春風の吹

宝治百首哥の中に梅薫風

後嵯峨院御製

ことしけは袖もよに梅の花かはこれにまさる風そまたせ

建長二年詩哥をあはせられ侍し時江上春望

前大納言為家

難波江や冬こもりせし梅かゝのよもにみちくる春の塩風

名所百首哥たてまつりける時

前中納言定家

梅かゝやまつらんかたにゆきよと玉章の花のたよりに

題しらす　よみ人しらす

我宿の梅さきたりとつけやらはことゝいふに似たりちりぬともよし

ふるさとにさかりあはさる梅花さこそくぬれてこむ人の袖

弘安百首哥たてまつりける時

大蔵卿隆博

ゆきちりしや梅ちらし春風のふきてなたかくの人の袖そうらん

弘長三年内裏百首哥たてまつりける

時帰鴈

前大納言良教

これかへるこしちの秋のなかそらに思ひすてゝや春のかりかね

題しらす　津守国助

かへる雁ゆくへもしらぬ越山路かすむ霞のすゑに見やなかめ

百首哥たてまつりし時

前大納言為世

契りしも秋にそまつの関はなれや越のかりそきこえし

帰鴈の心を　永福門院

なかめのこるやまのはの月に一声のゆくへにきゆる雲井のそら

中宮

よし野山かすみにて行かりの越さへ花の色を

百首奉りける時

入道前太政大臣

あさゆふに花まつころは思ねの夢のうちにそ
咲はしめける

中務卿宗尊親王

吉野山花とし見えてちる花とみえて雪のふるさと人のまれなる

寛平御時后宮歌合歌

紀友則

春霞たなひく山のさくら花みなもと人の縁をいそくらん

千五百番歌合に

後京極摂政前太政大臣

那し山も桜のみよりはなのくらにそ庭よりふく風をしる歟

嘉元百首たてまつりし時花

贈従三位為子

とをりはまたてらしまた新しら田の山の嵐のしるを
紛花とそる心を

前関白太政大臣

吉野にはうくひすきて花よりさきに雲そたなひき

源兼氏朝臣

さのみやはまたぬ花の風ふかみまたるゝさくらなりけり

前大納言為家

さくら花さきにけらしなみねことにみれはしら雲たなひきにけり

正治百首歌よみてまつりけるとき

式子内親王

たかさこのをのへの花のあけほのはいくへともなきみねの白雲

題しらす

和泉式部

みる人はをりてはいはし世の中にさくらはえたにまかせてそみる

鳥羽院御製

君かよのはるはさくらもさきぬれはむかしのけふをしのはましやは

柿本人麿

そのかみのとしをへてこそ桜さくみよしのゝ山の花の盛を

千五百番哥合に

前大僧正慈鎮

さくら花さくとしもなきみよしのゝ山のかひある白雲

禁中盛花といふことを

伏見院御製

桜花やゝさかりなる百敷の雲ゐにいまそかさしける

正治百首歌よみてまつりける時山花

山階入道左大臣

ときは木のなかにましりて山さくらさかりにけりとみえつるかな

百首歌たてまつりし時

権中納言公雄

三芳野の花そふ風の袖の香をまちかねてさく山桜かな

法印定為

花の色もまたしらくもの山のはにかゝれるまゝに白雲の絹め

百首歌たてまつりし時

左大臣

山さくらさかりになれはさそふらん嵐の白雲

弘安百首歌たてまつりし時

前参議雅有

○桜雲のよそに見えし雲風にさそはれ峯の花のさかりを

西園寺の八重桜さかんとよませ給ひける

常盤井入道前太政大臣

山たかみ影もかゝれる白雲の八重にかさなる花桜かな

正治百首歌たてまつりけるとき

宜秋門院丹後

しら山の峯にかゝれる雲や嵐の桜の正木なるらん

久安六年崇徳院に百首歌めしける時花の歌

皇太后宮大夫俊成

山桜さくらん衣よあくかるゝ人の心やみねのしら雲

家に花五十首哥よみ侍りける時

後京極摂政前太政大臣

ちるくそ花と知りなから吉山すゝのおくまてみれはしら雲

亀山院位にましましゝ時人々にて一枝おりくさせられけるを見侍りて

侍りける

後京入道前関白左大臣

君かたゝちよにしれ山桜をもちれぬ花のこゝろに花をあふくかな

御返し

亀山院御製

ちりぬへきたか山桜の桜花なれそふりての人のこゝろしられつゝ

嘉元百首哥よみてまいらせし時花

前大納言為世

桜さく花の雲の桜よおもあまたくもしつかしねの花のそする

続千載和歌集巻第二

春歌下

寛喜百首歌めしける時　惜花

後嵯峨院御製

かけつゝも思ひし日数はなかれぬとて花こそ春のなこりなりけれ

西園寺入道前太政大臣家三首歌に

花下日暮といふ事を

前大納言為世

あかすしてなほ木のもとに暮ぬとも花のしたかけ春そ（?）わすれぬ

題しらす

源重之女

春の日は花に心のあくかれて物思ふ人とみえぬへきかな

藤原清輔朝臣

思ひ出の色やゆきてなかむらん春のゆふへの山桜かな

家の歌合に花下明月

後法性寺入道前関白太政大臣

春の月はひかりを花にまかせつゝ花こそ月のかすみなりけれ

花の歌とてよませ給ける

順徳院御製

時しらぬ山風さそふ花の色のかつ散る雲とみえわたるかな

よし野の山のはなの千々にちりて山

、人乃花ころ乃帰とゝゝ佗らん

鎌倉右大臣

みよし野ゝ山分衣とかりてなれ花まてやと
山花とのみなかめしを

談天門院

吉野山やまの桜の色ゝいまそみ山の嵐の白雪も
明しかたの空の影に梢まてなりの峯の雲

前大納言為氏

百首哥よミてまつりし時

六条内大臣

春霞の八重たつや山より白雲のよそにける桜かな

正三位為實

嵐ふく四方の桜花ちりける秋代の梢より白雲

題しらす

萬秋門院

春よりこの山の峯の桜花たなひく雲の色そ見ける

百首哥よミてまつりし時

権大納言経継

白雲ハ立てもかくれてさしの山花のおくよりあるちるかな

題しらす

平貞時朝臣

みよし野やむかしの花よりつる月のひかりそのこる山桜か

前大納言俊光

かさねつゝちよの春をもまちえてやゆくすゑとをきみよの山桜かな

百首歌たてまつりし時

内大臣

花の色はいくよの春をへてもなほ山さくらのこゝろわすれなに皆

題しらす

邦省親王

かすみやたなひくよものをちこちにさそはれみえぬ花の香ぞする

嘉元百首歌たてまつりし時花

入道前太政大臣

山さくら花のさかりの白雲はちらぬかきりはかゝりけり

さゝ浪や志賀の山路の花ゆへにはるゝ世の花ぞかはらぬ

百首歌よませ給ける中に

後鳥羽院御製

花ゆへにあかぬ心のなかりせは

故は花ともしらすして

入道京親王性助

花歌の中に

源兼氏朝臣

元應二年内裏歌合に桜

中務

年をへてみつる桜花けふとまたこそみれあかし花

堀川院御時中宮御方にてもとゐをそへて
花をおりて侍りて御前にまいりてさしおかせ
ましせけるによめる

源俊頼朝臣

吹風をいとひてのこるほとに花にちる風雲のさそはれは
ちりしらね

平宣時朝臣

いまそしるこころしもみし山桜ちるにはなれしおもひ今朝

前大納言為家

花ちらてなをかさむしろやみよしのやまとかつらき世のかりそめ

弘安百首歌たてまつりけるとき

安嘉門院四条

いつくらんけふまて雨の宿ならぬ花とちりなんのこるらん

花歌中に

ありしよは風もちらぬ桜花我うゑてみしか今日

藻璧門院少将

よみ人しらず

春の日の花のちりのこる人の色なるをいつたのまん

白川の花にゆきてつきの日よみ侍ける

権大納言長家

立かへりまたもきてみん山桜花咲白河のしるへとなれよ
題しらす　白河院御製
尋つゝさ世にすみかたき山さくらやよひのそらに花の色
左京大夫顕輔
惜むとてとゝめし山桜花のちるにおもひそふらん
千五百番歌合に
いかはかり惜む花のちるらん人の心をみよしのゝ風
野宮左大臣
前大納言為世すゝめ侍し春日社三十首
歌中に
民部卿為教
たつねこし花ちる人やとまらなん山かせにまたちらんとすらし
中納言定房家にて花下日暮といふことを
よみ侍ける
あかなくに暮ぬる山の花の下にたちはなれぬ花をみるかな
法印為定
花下露といふことを
順助法親王
をきてもゆかしきのこる山桜ちりしく花の露のしたに
花の歌の中に
法印長舜
ちるとみしまかきにのこる花の香はさそふ風の山の色

おしなへて花のつきさに成ぬれはすゑもよりまつ地は哉あらし

平宣時朝臣

けふちらは物かはいそく桜花のとけき春の色とみえなん

藤原隆信朝臣

風のうへにおもひすてつる山桜つれなき花のさかりまつらん

前大納言為氏

寛治八年八月高陽院哥合に桜

権中納言匡房

春風はのとけくもなれ花の家の色はなれてそ山の野しらる

花山院御製

あさつ山の桜はいさゝらに人ちもみてそやとさらん

太宰権帥為経

うつるともしらしはなにの山桜ちれはそらなる峯の白雲

嘉元百首哥たてまつりける時花

前攝政左大臣

いさつしよ春の山した風そふく残るも梢の花かちるや

露もなとよそ世語

今上御製

ゆく春をとめて花にはあたなれと風もさそはしやらん

花の行の中まて

仁和寺二品親王守覚

花とみるよそめはかりの白雲はいつもときはの山の色

正治二年九月十首歌合落花

前中納言定家

桜色の庭におほみし桜花ちりのゆふひの春の山風

小野皇太后宮歌合 まして人にみちるかな

花ならてかゝこれはさくら手折る名よみ作りなり

弁乳母

都人おもひし物を守し桜これともいとや風もよきなん

元永元年内裏歌合に桜

中納言朝忠

おくれしと移くしりき桜花惜し程こそのけりなん

題しらず

貫之

春の時はうとみし大宮人の花を色桜さまの都

よみ人しらず

たおりても桜かりし桜花色つく風のさかりさそ之

建保四年後鳥羽院に百首歌たてまつりける時

参議雅経

春色は花なくしもあらん日にそのまゝ見えし子の峯の桜は

名所の歌よみ侍る中に

津守国助

桜花ちりてしばしと常盤山さくらに木ずゑ春風のふく

惜落花といふ心を

九条左大臣

ちる花のおもかげ多く残る方にゆくさきさへ見る山ざくらかな

百首哥よみてたてまつりし時

入道太政大臣

なれて見る老木の花とちりやまば後に誰かはながめやるらん

雨後落花を

前関白太政大臣

春雨にぬれし木の花は風にさへかしたまらぬちりまさるかな

花哥の中に

中務卿恒明親王

立よる風をいとひてまちしかとは花もちりしと思ひけん

後法性寺入道前関白家哥合に花下明月

俊恵法師

花よりも月ぞこよひはをしまるる山のはちかき宿としらなん

修理大夫顕季人々に花十首哥よませ侍

りけるに

俊頼朝臣

行とまる人はさもあれちる桜もちるとみるよし山の心かな

題しらず

大納言経信

春風の吹まよふ河ぞさくら花ちりかふ枝よりさくらとぞ見る

前内大臣通

よしのは花のさかりとなりにけりたかねの桜いまやちるらん
山河よ花のしからみかけてけり

従三位氏久

春の花の浪を岸ねに吹よせて風かけたる山河の水

西園寺の花のさかりにつかはしける

常盤井入道前太政大臣

移ひ行春の花しも此水にうつるの色やかはるらん

返し

西園寺入道前太政大臣

冬こえはあとも大雨て桜花はいろ浅香にちりけらん
花繞以之ふかき哉

源兼康朝臣

あはれ又いかなる春に見えてなん君まちつけて花の梢を
見しらん

源邦長朝臣

吹風をうらみもそへし山桜色を立ては花の名にたて

平貞時朝臣

さそてみるうつろひかはりとも行末てやさらす嵐に花のちるらん

平斉時

きのふこし梢の花はこのねかひのあさけの色の春の白雲

前大僧正実超

吹そふる梢の花は風にかくしのこして花のちるらん

池上落花といふ事

藤原泰宗

ちりのこる汀のさくら影みえて花の浪たつ春風そ吹

嘉元百首歌よませられし時花

津守国冬

さくら花ちりかふ比の山嵐の跡にのこる峯の白雲

法印定為

風ふけは外山の山桜花のちるこそ雪とみゆらむ

文永二年八月十首歌に落花似雪と

いふ事を

前大納言為氏

雪とのみちりしく庭の山桜ふかくも花の木のもとの

ちりの花にさくらをいはまし

入道前太政大臣

みつからはされし哉

伏見院御製

ちりかゝる雨夜の里のやまさくら河原の風の花の白雪

歟

入道前太政大臣

こゝろしもみるそかひなきさくらまてちりくる庭の風の白雪

正治百首歌よませられし時

後京極摂政前太政大臣

なかきさとこそなかなか花の雪とや今はちるらん

題しらす　　後鳥羽院御製

よしの山花は雲とみえてに有明の月に花そちりける

前大納言為家家にて百首哥よみ侍けるに

従二位家隆

みよしのゝたかねの風も吹かへし花にちりかふ花の白雲

建暦二年四月内裏哥合に桜

修理大夫顕季

ふたゝひと花もちりて山桜みるかけにもゆきかよふなん

月花門院へまいらせける

常盤井入道前太政大臣

山里は心も人のゆきすりて花は雲ともみえぬへきかな

永仁二年三月内裏にて三首哥よみ侍るに

河山落花を

藤原為道朝臣

ちりまかふ雨のへにける山かせもなをてうつ花をたにこそ見まし

春風花をさそふ色をみよや世にはなる

伏見院御製

えたよりも色つきそめて花にほふさそふあらしはものからそなき

花の哥中に

藻璧門院少将

たのめおく風より先に花ちりて世にこそ遠く花ともちりし成

西園寺入道前太政大臣

袖乃上にちる花多くハしらくもやけふハ我か春乃名残なりけり

落花閑花不見人とよめるを

大江千里

詠よして春乃花の前にて花乃ちりかゝるまてそみる人乃なき

謙徳公家乃哥合に

よみ人しらす

鶯乃風よ花やさそふらん春のくれ乃ちるをしみかな

みとり乃まゝ御ときはまさ世なりけり

今上御製

さくらハ春乃山乃花をみんとやすまきのかすみの月

百首哥よませ給ひし時

前大納言為世

おほそらハ海もひとつの夜の月はかりとみえしかすみなりけり

二品親王覚助

かきくもり月みてなかめの春の宵のかすむ春の宵と

春月と

平時村朝臣

春乃夜乃すゝにかすめる海にそて月やうつるらん

後深草院少将内侍

かゝるとハみし夜のかつ久くもの荒にかすみ春の夜の月

よみ人しらず

ほのぼのとかすめる海の春風に月影へたつ霧のうちの世か

弘長元年百首奉りてまゐらせける時暁の心を

前大納言為氏

見る人もなかりし世をは白雲のかすみにみえて春のよの月

春暁月といふことを

伏見院御製

月影を手にも見て山の端の花まて明る春のあけほの

延喜の御時の屏風に

躬恒

見わたせは花のさかりの山吹の花のさかりにあふ人もなし

宝治百首奉りける時

籬款冬

前大納言為家

山吹の花こそいはぬ色ならめ籬をとふ人もかな

土御門院小宰相

葛のはのうらみもこもる籬よりさく山吹の花の色まさらし

なほしのふ世のためしなるらむ

法皇御製

さくら花ちりにし後は山吹のさかりも籬に残る春かな

嘉元百首奉りてまゐらせし時款冬を

権中納言公雄

暮ふかき春の霞をわけしもこえやは岩根の山の花
春の雲の中まで

僧正覚円

同じ春をわけしといはむ多かるも思ひやる山の桜花ぞ見ゆ

後鳥羽院御製

嶺の花雲のかけはしたえぬるや井手の山ぶきうつろふ如し

弘安百首歌奉りける時

前大納言為氏

桜さく春はさかりと海ならし山の花よりかへりて風ぞ吹く

藤懸松といふ事を読侍りける

法皇御製

松にしもみどりの色をかへてけり紫にほふ藤なみの波

右近大将房実

いく春の花のさかりを松が枝にかけてしられむ藤の若かづら

三条入道内大臣

末葉よりそめてや花のたえなまし松にかかれる藤の蔓

隆信朝臣

奥津風吹こそみたれ松がえにかかる藤なみ

うちはへる紫の藤の花の色のさかりなれど

とよみ侍る　伊勢

錦織の影にそてたかし波の花よりもくたはかりなる

天徳四年内裏哥合に藤　中納言朝忠

ひとゝきにふたゝひさかぬ藤なれはまつにもかゝる浪そかゝれる

屏風の絵に松に藤のかゝれるところ

平兼盛

花の色をなほもとてこの錦の松にかゝれる藤波

題しらす

大中臣能宣朝臣

桜花ちりしくにはをはらはねはきえせぬ雪となりにけるかな

在原景緑

ゆく春の日をなかくともさそはれて山桜かな

寛治二年百首哥に惜花

山階入道左大臣

いまさらにとへかし桜花ちりなは風をうらみもやせむ

題しらす

右大臣

ひとゝせにまつとはせすやちるも花をとかめさらなむ

百首哥よみてたてまつりし時

関白内大臣

桜さくたかねの空にしられ庭の桜のちりかふ雪

暮春の心を　前権僧正雲雅

ちりかゝる花をさそひて行水のあはれはるのくれそ
跡しられ

権大納言兼季

吹おろすあらしの山のさくらちりて井せきにそゝく花の白波

暮春の心を　西園寺入道前太政大臣

ちりかゝる花のかゝみの山の井のあさくも春の暮にけるかな

人ゝ五十首哥めしけるついてに

後嵯峨院御製

徒に春暮ぬる花の名残をおしむともしはしとまれ

續千載和歌集巻第三

夏哥

寶治百首哥たてまつりける時首夏

衣笠内大臣

夏衣のこ袖みし程に夏衣といひ日より夏やかへるらむ

四月一日よみ侍ける

和泉式部

きのふまで花の袂に暮してきけふはかはるもまたをしき哉

卯月のはしめをそれとやみん今朝の衣のうすきいろにて

安嘉門院

あさからぬ花をなくさめて夏のころも大和にはやしる

永久四年四月鳥羽殿歌合に卯花を

左京大夫顕輔

朝日山ふもとの里の卯の花をさらせる布と思ひけるかな

千五百番哥合に

二条院讃岐

神まつる卯月の花もさきにけり山郭公ゆふかけてなけ

弘安百首哥たてまつりける時

式乾門院御匣

早苗の江のまつの久しき時名も縁里とのみ一声そなき

影しらぬ よそ人もなし

名残とハ何方ものなけ郭公ことそに綴人ハあり之し

亭子院歌合に　在原元方

去山ハさんすゑの稗ゐまなけ時鳥まつしむ稗ゐまなけ

鶯しらん　前大納言公任

かのかそききての限りは待ちて綴人のこてに祢かぬなう

宝治百首歌よみてまつりける時約郭公

郭公初音まつらし時世そかなりきと長しもあり定め

初の化と

後深草院少将内侍

明石より夜の風あれと時なまつしいうひ祢え了人

関白家新少将

嘉元百首歌よみてまつりし時郭公

前参議雅孝

待わひてまたうちしまえ時鳥あまたそ後の一こゑかな

百首歌よみてまつりし時

前右大臣

我宿の人まつよひや郭公その初音のまつあかさん

嘉元百首歌よみてまつりし時郭公

前関白太政大臣

行く人もききぬはいつまてか我かまちてそ惜さりけし

夜の窓の中らく

前大納言師重

今とはゝ川とよみつ時鳥なく我たにまたれし夜半

皇后宮

鳴やさつきの深山時鳥色のをりくのこよひなかな

慈道法親王

郭公いそかぬ初音きくやこの人のきゝなさらむ

題しらず

今出河院近衛

わか人の川の奥まてたつねきてよそにまされて聞郭公かな

伏見院御製

さとのなか時鳥いつしか時鳥夜中人まちて聞しなりけん

法橋顕昭

夜のほとゝきすなくやさつきの時鳥まちこそ年もなほしつや

三条入道左大臣

待かねていく夜かはるとあかしつるひとこゑのみそきこえける

平時元

待ことなくなきひとこゑもほとゝきす郭公ことしはいかにまちかねし

藤原泰宗

時鳥月待ことにねぬよはに声ありあけの村雨の空

前中納言季雄

里なれて里わかずとも時鳥なくねにのこる月にさへはれ

権大納言兼季

有明の月はいまはし時鳥まつよかさねてひとりそねぬる

寛元百首哥よみてまつりし時郭公

前大納言俊定

ほとゝきすすかたは見えて時鳥あけわたる有明の月まつなく

おもひしを

まちなれし五月もたゝかたふくに時鳥まつしはしきかせよ有明の月の夜

題しらす

藤原基俊

時鳥まつ田のほとゝきす夜ふかくもなきつるかたのあふさかにしき

安法法師

ほとゝきすたつさのひとつそなかれ郭公きなれなし夜はあけしとそいふ

伊勢

時鳥なく五月まつはなたちはなの人をこそまて

暁聞郭公といふ心を

宗尊親王

ほとゝきす在明の月の今はとて山の端とゝめしの一声

人のおもひきえまして郭公きこてるあやとまよひ給ひけるに

源道済

郭公しはしまちけるにみえ里にも又まつ人そまたるゝ

夜哥の中に

法眼行済

山ちかくすみて時鳥なけつる雲のあとなくありけり

權中納言爲藤

まれにみなよそたの見時雨のみそ今はいつとなかれど

宝治百首哥めしけるにてよみ侍ける哥云

後嵯峨院御製

秋はまたいさゝかそゝえん時雨まちつる旅の空かくしを

前大納言爲世よませ侍ける春日社百首哥

中に

藤原爲定朝臣

露もりに時雨やさそふ時雨まつかいなしきたひてうしを

題しらす

平宣時朝臣

かゝるへき上露ても思ひに給てゝゝ秋の空かな

法印長舜

なみえの後は雨とや時雨なる雲しけくもそ秋すくれなる

津守国助女

いつもゆく舟はまたれぬ花とや今は又なる霞む時雨の秋

二品法親王覺助

秋たにもいとゝ物思ふ秋の哥云時雨かなへとひとりきくらん

百首哥めされしついてに

法皇御製

しくれゆくかたもしらぬ雲の時雨かきくらしまことやつれまし

法印定為

ほしこひとまちゐてや時鳥けふはいはせの森に鳴なん

永承五年祐子内親王家哥合に

弁典侍

いはゝともまちつるものを時鳥きゝてそいとゝ心なき

題しらす　西行法師

まつとふる夜はもかなしき時鳥きゝてそなをいとゝれぬ郭公は

永保四年内裏にて菖蒲郭公といふを

京極入道前関白太政大臣

今そきくまたそをのゝ郭公これやみそめとなる一こゑ

長郭公といふことを

太宰大弐高遠

夜とゝもまさきのかつら時鳥あかつきしも鳴つくるかな

承暦二年内裏後番哥合に郭公といふ心をよめる

権中納言通俊

名のみ

ありまつ人よからし山ほとゝきすなくねをまちてなかきよをあかすかな

禎子内親王家摂津

ほとゝきすおとつれしかと時鳥まちてきゝしはなれし一こゑ

後徳大寺左大臣のもとより山ほとゝきすの時鳥

きゝにまかりてきてつかはしけるとよめりてけり

返し

上西門院兵衛

あけぬとは鐘の音はまだ聞えねどしのゝめしるき老の寝覚に

夜中に　　前参議雅有

まつ山の峰の遠さに声はせでかくれゆくなり時鳥かな

社頭にて郭公をきゝて

前関白左大臣近衛

明ぬるにいでゝそきこゆ時鳥まつまの夜はと思ひけるかな

暁郭公を

前大僧正良信

ありあけの月の入かたの数もなく一声なきて過る郭公

題しらず

伏見院新宰相

かへるさの月のいるさの山のはにきくも稀なる郭公哉

永福門院

郭公なほたれの横雲に鳴きすてゝ行く曙の空

弘長二年亀山院に十首歌たてまつりけるに

内野郭公

山階入道左大臣

時鳥ひとこゑ過ぬむさしのゝ草葉の露に夕暮の空

正治百首歌たてまつりける時

前中納言定家

郭公さつきやまとの菖蒲草やどの軒端の村雨の空

家歌合に羇旅郭公といふことを

光明峯寺入道前摂政左大臣

谷ふかみ志つかにきこし時鳥ありし雨のふる林なりけり

題しらす　源邦長朝臣

難波かたこやのあまやの入江にや水のしたゆくかとめのかよひち

寛治百首哥たてまつりける時早苗　祝部成茂

五月きてみしめのうちのたにならはにる神のみたへ早苗とるなり

題しらす　堀川太政大臣

都まてそのこゑをきゝてもや山田の峯にさなへとるらん

千五百番哥合に　野宮左大臣

あし曳の山下水をせきかけてよその田井にさなへとるなり

法眼行済小野社の十首哥に　法印定為

見わたせは二三山もとの松けしみそらをかけてさなへとるなり

二条院親王家五十首哥に早苗　津守国道

下さへはみなから夜のあけぬるにさなへの葉ことに田にさなへとる也

題しらす　前中納言経継

雨ふれは花橘の風吹てさなへとるなりさとの田にたに

百首哥よみ侍ける中に　皇太后宮大夫俊成

あるじにいふむかしの人よそへて花たち花の風ならん

盧橘薫袖といふ心を

基俊

袖にしも昔の人にしのふるかし花橘のかりの少人人 匂ふらん

平経貞

風かよふよその寝覚の風の袖に袖の香そへて白ふなるかな

百首歌よみてまゐりし時

権大納言定房

梅の香をあらしのさそひきて心まさりし時のかは

千首歌よませ給ひし時

後鳥羽院御製

郭公なきてすけ梅のなれむる空の夕まくれ哉 元

嘉元百首歌よみてまゐりし時郭公

贈従三位為子

ほとゝきす今やなきの杜わかれくにさ月をまつくかへしまき 郭公

久安百首歌よみてまゐりし時

皇太后宮大夫俊成

さ月こそなれの時にまたれ時鳥いとをしてよそへて聞んなん

嘉元百首歌よみてまゐりし時郭公

昭慶門院一条

時鳥そのさ月にはなれぬれど雲雨よふ元になつかしかり

五月雨をよめる

祝部成賢

さみだれは綱手もしては河人のたえぬ方ぞなき袖のうら波

津守国助

五月雨はいはせの水も音まさりて川へさえだる五月雨の比

河五月雨といふ事を

前大納言為世

山川のいはせもみえず音もなく人こえし波の五月雨の頃

百首歌たてまつりし時

宇井もさしこみさへにつたえしはけさ入みえぬ五月雨の比

池五月雨を

権律師實性

池水のみぎはもみえず成まさり庭にながるゝさ月雨の比

をつらん

大江宗秀

日数へて猶やこえらん五月雨はきしもみえずなるみなせ川

高階宗成朝臣

五月雨にあれてそみる山川のみなそこ深くすまし世も也

百首歌たてまつりし時

前関白太政大臣

かみ川見えさ雨まさりて五月雨の志つかにのこる晴にさえ

きえしらぬ

前大納言為家

五月雨に〔…〕ふもとにて

家百首歌に山五月雨

光明峯寺入道前摂政左大臣

立田川〔…〕

前大僧正道昭

水まさる〔…〕

百首歌よてまつりし時

〔…〕

権中納言為藤

名所百首歌よてまつりける時

前中納言定家

五月雨は〔…〕山〔…〕

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

〔…〕月〔…〕

名所夏月といふことを

大江貞重

明やすき〔…〕山〔…〕月

弘長三年内裏百首歌たてまつりける時夏暁月

前大納言為氏

夏の夜の〔…〕月〔…〕露の〔…〕山の端の月

宝治百首歌めしけるついてに夏月といふ事をよませ
給ける　後嵯峨院御製
夏の夜はふけゆく涼しさに入月のかけや秋をしるらん
鵜川を　中原師員朝臣
夏のよは篝さして鵜川をやせきすらんあはれけふも過しかし
前内大臣通
すゝみ舟のはやせにさわく大井川せに残かゝり火の光なりけり
入道前太政大臣
大井川うかふ篝のさしなから月はいつるとみえぬなりけり
弘長三十首歌よみて奉りし時
前大納言為世
うかひ舟瀬々のかゝりの白浪もよるこそみえて夜半の月かけ
題しらす
順徳院御製
おほゐ川きしのかゝり火さしなからあはれいく夜かかよふらん
新拾
夏草は日毎にしけくなりゆけと露はかはらぬ人のこゝろか
建保五年四月庚申五首歌に夏暁
参議雅経
夏の夜の露もまたひぬおき出てみれはしのゝめそ涼しき
百首歌たてまつりし時

法皇御製

夏草の花のえにおく露をも月の宿とわきてこそみん

従二位宣子

しけりあふ夏野の草のすゑ葉にはかくれ行人そまよふ夏

夏草をともよりせぬ人そ見えける

院御製

ともし火のかけにすゝしき夏の夜の草葉の露をみる庭の夏草

亀山院御製

踏分て行人もなき夏草の末葉にすゝし庭の夏草

山階入道前太政大臣女

あさみとり夏の草葉とみえしの風や夏にそみゆる

前大納言為世

人こそしらね夏草のよりせ給ひし

春日社百首中に

藤原親房朝臣

夏草の茂りあひぬる萩の下葉や秋の風をまつらん

螢をよませ給ひける

院御製

風そよく荻のはのみたれて螢の影もみたるゝ

嘉元百首歌たてまつりける時螢を

前大納言俊定

夜ふかく鹿の難波のあしもみえてけりは菅なりけり

贈従三位為子

松井河原やけふもやしかもなかりけりくもるはなにか

弘長内裏百首哥よみてたてまつりける時沼菅

前大納言為氏

かくてはさのみあさくも沼の菅の上にかくもうつつは菅ならむ

百首哥よみてたてまつりし時

津守国冬

菅原やふしみの菅もふかくしもやどらむ月かげ

文永八年七月白河殿にて人々題をさくりて

百首哥よみてたてまつりし時牧菊

前大納言為家

牧菊もやどるかげそはなの霜に結ばれ

夜哥中に

西宮左大臣

よるはたにも人めかれゆくのこれる庭のをとこそ花の色

寛和二年内裏哥合に

藤原惟成

秋きくにしもおきまよふ花のしたにうつろひもみえず

弘長百首のうちにてまつりける時夕立

衣笠内大臣

此里もかゝりしものを夕立のかつはれわたる峯
従二位行家
わかの浦やまつの山の夕立の空
文永二年七月白河殿にて
七百首歌よませられし時夕立をよみ
ことし
前大納言為氏
木のしたにかせ吹そふ塩屋の庵にかゝれる夕立の雲
宝治百首歌よませ給ひし時夕立
後嵯峨院御製
かきくらし雨もふりみたれ夕立の雲のいつくにかゝるらん

弘安百首歌たてまつりける時
前参議雅有
ひとむらやそこともみえぬよそにふる雲のした風なほすゝしき
百首歌たてまつりし時
入道前太政大臣
夕立のすくる峯の村雲におくれてはるゝひかけの峯
夕立を
祝部成久
稲葉そよくかせにまかせてかたよりに日かけもみえぬ夕立の空
題しらす
中臣祐賢
秋きぬといはぬはかりそ門家すゝしかせの下道

弘長百首哥よミてまいりける時納涼

前大納言為氏

涼しさは立よるからに忘れけり秋もちかきの夜半の風より
涼しかりけれ

宇治入道前関白太政大臣

夕されは志のゝをさゝに吹風のまたきに秋のけしきなるかな

建保四年百首哥よミてまいりける時

前中納言定家

夏の夜はかへる風にこそ移るらん風にまかせて秋の色

久安百首哥よミてまいりける時

上西門院兵衛

夜衣さはりに涼しきは聞えしともつれに秋やきぬらん

山階入道左大臣家の十首哥よミし納涼

源兼氏朝臣

せみのをる庭の風吹は忘れける秋をもとに通ふやかな

為道朝臣

夕暮は森の下風音たてゝ夏もなきあとにせみの声哉

寂蓮法師

志のゝめにかへさもなかはまつ夜山の梢にしらく蟬の諸聲

百首哥よミてまいりし時

大僧正道順

とふ人にまたれぬ桜のちりしきて山ふかくしき松の下道

関白内大臣

志からの子のきこえのにまかせは蝉のなりたゆるときもなし

前関白左大臣　神祇

見わたせは岸の河原に音すみて神よりかよふ神の杜

昭訓門院春日

里とてもこゝろかりかりみえてとしやとしふる神のみ杜

宝治百首歌にて　まちの村雨月後

冷泉太政大臣

うきくもはのこる水のおもに吹かせそよくちりてみえまさりける

百首歌よみ侍りける中に

皇太后宮大夫俊成

みかくに秋やしらんきこえ川波さよふかくる風ぞ涼しき

千五百番歌合に

後鳥羽院御製

見わたせは川瀬の風の玉ものみたれて志られ秋やとしるらん

續千載和歌集巻第四

秋哥上

百首哥たてまつりし時秋のこゝろを

入道前太政大臣

いつしかとけさはつかく秋にとて袂すゝしき秋の初風

おなしこゝろを

中務卿宗尊親王

きさこれは露そひまさる庭のこゝろやかせにひさしく秋やきぬらん

千五百番哥合に

惟明親王

きのふまて萩の下葉もかはらぬをさてけさいつしか秋の初風

題しらす

光明峯寺入道前摂政左大臣

河のせに秋風立ておとすなりいつのまにかは松吹ぬらん

百首哥よみてたてまつりし時

前中納言為相

たつ川水に草葉の秋のかはるそて年の一夜にかはるらん

題しらす

中納言家持

たなはたの舟のりすらしまそかゝみきよき月夜に雲立わたる

山邊赤人

ひこ星と七夕つめとこよひあふあまの河原に浪たつなゆめ

亭子院哥合哥

よみ人しらす

あまの川ふりて後こそまされけれ渡さぬ中のちきりひさしからん

亀山院位におはしましける時七月七日人々に

七首歌めされけるによみてたてまつりける

前大納言為家

天川流しそめけむ七夕の契は雲井にあらはれにけり

家の六百番歌合に乞巧奠

後京極摂政前太政大臣

星合の空のひかりとみゆる物は雲井の庭にてらすともし灯

七夕の心を

前大納言有房

七夕の露の契にまさりては秋はくれともひさしかるらん

八日暁の霧をきてかたをおもひて法性寺入道

前摂政のもとにつかはしける

選子内親王

露をきてたちし程を思ふやは星合の空のあかつきの月の光

弘安百首歌たてまつりける時

入道前太政大臣

明はてゝ川せの浪に立かへりまた袖ぬるとわたる七夕の衣

ほしもしらん　源兼氏朝臣

七夕の雲の衣を吹風に袖の別はいそきもやせん

閏月七夕といふ心を　　前中納言定房

契おきてをしむ月日の数そへて二たひあふも七夕の空

太神宮にてよみてたてまつりし五十首歌中
り
後鳥羽院御製

桐露のこゝろやさしき山風に乱て物は秋そかなしき

野分しらせ

忘るなよ又は前の秋まても思ひすてれの萩の上風

西洞百首歌よみてまゐりける時
前中納言定家

いくかへりなれてもかなし萩原やすゑこす風の秋の夕暮

千五百番歌合に　　二条院讃岐

さりとも秋のあはれをそへてくる蓬か宿の萩の上風

述懐百首歌よみ侍りける時萩
皇太后宮大夫俊成

わか袖は萩の上葉のかなれやそよと見ゆる人ことに見え

寛和元年内裏歌合に露
花山院御製

萩の葉にをける白露たまとて袖にくつてそおなしたまらぬ

嘉元百首歌よみてまゐりし時萩

権中納言公雄

はてもなき霧のまかきの夕波しろく秋を[illegible]

題しらす

法眼慶融

吹そむる荻の風は[illegible]まつ秋の夕風

弘安百首歌よませ給ける時

入道前太政大臣

冬枯は野への風におとろへて吹風の冬をこえみて秋露をこそ

弘安八年八月十五夜廿首歌に秋風を

前大納言為氏

村雨の晴ゆくあとの荻の葉にふきしをれ袖にも露そ秋の夕風

題しらす

伏見院御製

村雨は桐の葉おつる庭の面のゆふへの秋をさそふ入かれ

後二条院御製

高砂の夕暮とてし秋をしる人はきよらに物やおもふと

閑中秋夕といふ事を

前中納言定資

さひしさを我ひとりにはなかめなん秋の夕へはいつもなかめん

秋歌の中に

二品法親王覚助

今さらになにかうしとかつけていかん世の中こそ秋の夕暮

前大納言経長

物思ふ人はよそにやなかむらんおのか身の秋の夕暮

平久時

いかにせん物思ふ袖そ涙にはほさて露そふ秋の夕暮

嘉元百首歌たてまつりし時　露

太政大臣

そのまゝに涙ほしあへもしつゝてに露やいとゝ秋の夕暮

建暦二年内裏詩歌合に水辺秋夕

後久我太政大臣

みなせ山夕かけて吹風下葉や秋の色にまさるなるらん

遊義門院

題しらす

わきてなと袖の涙や草葉にてはいろ流きて家となるらん

名所百首歌たてまつりし時

前中納言定家

むさしひろき秋風そよのゝ庵より家は草葉の露にぬれつゝ

羈旅景気乃落に結付侍る

九条右大臣

白露のおくてまたるゝ花すゝきほにいてゝ風になひきまたるゝ

題しらす

津守国道

花もてきそる涙そておる家の風袖にみゆる秋の夕暮

古口秋蘭といふことを

あはれまた何となかめん住捨て野となりぬる庭にはれなきさらん

前備前入道性

天暦八年御屏風に

源公忠朝臣

秋の野にかくさける花これはこの人あまたをしてまさりたる
ゆふされは女郎花いさをはいかにみすらしとにさる紫のはに
やかてかくてあきの花におきつるきこゝちさは
の花りをせさく秋深りさてしまとをそ
秋の深きにあはれしりとつけさるなれ

よみ人しらす

しら露の花の色をもみせてしかなるはさらにもふかき
つ曲り

選子内親王

いろく花いさこに包む大野原の風の音はのとけ
跡しらす

前大僧都覚定

我やとの庭の秋萩咲しよりおきそふ露の風にまかせて

邦省親王

たまくらは風の忍ひさきえぬらしきえぬの袖つゆも衣多えそうろうぬ

従三位氏久

又あれくもしもあかりゆく風そよきて露ちる萩のはな露

建永元年和歌所三首歌に朝草花

従二位家隆

我袖とけさはわか世をすてゝは秘夢の萩の白露

題しらす　　讀人しらす

ひさし野は秋行来て秋萩の花ちり敷ほとりしきれと

土御門院

あはれとくとみすかたの荻萩のうつろふらん

野萩を　　藤原為家朝臣

袖のみそみえぬ色なれ春日野のみるよりさきの萩か花ちり

百首奉りける時

法皇御製

たかまとの尾上の秋を吹ひくと萩の花ちり

名所百首奉りけるに

僧正行意

今日みれは野の秋萩に花みぬる人の袖の色かな

題不知　　大納言藤人

さゝ原の野への萩の花ちりぬる露のうらみかな

後徳大寺左大臣

四方にみゆる萩の花さく秋の夕暮

壬生忠岑

秋の野の下はとまれて庭の花の色をまたなん

永承五年祐子内親王家歌合に

相模

露しけき萩の下葉やいかならん秋の野原にいかに咲也

小弁

志ら代もられ

秋風の妻こひかねてなく鹿の萩のしからみ

百首哥たてまつりし時

前関白左大臣　押小路

此ころは風のゆかりのかをそたにとへや萩のはかへの庭のゆかりん

忠房親王

さしかも萩の下葉に秋風のふきまよふらんつきやなかれん

秋歌中に

従三位為継

秋きぬと風のみ涼しくみえしより荻のうはかせそよくなる

文治百首哥たてまつりし時

正三位知家

高円の山の萩か葉色つきて秋風よそに風そみたるる

萩しらん

法印定圓

夕されはしけかりしも秋の色つく物とや庭のさかり

寛元百首哥たてまつりし時

前中納言経継

是れ寒く涼しくて法へさしよるへき書こひて庭に鳴ん

法印定為

こゝろある人の簾ハ重もなき秋をたゞしに書やらん

題しらず　行念法師

あきそゝふ嵐の音のこゝろの秋の松の風しかすかにひとつ

中務卿宗尊親王

小倉山ふもとの秋の色やなほ夕日ハまたゞしも夕のたえまよりなか

月下簾を　後堀河院民部卿典侍

さそふ風ふもとのたちこそ明れる山のはいづる月影

前大納言経房

月見んと我をこそ見るらめあるの音をまくすゝ簾かな

対月簾といふ事を

平貞時朝臣

まちわびてたゞくかすかに簾の外に風のうちの月もかくれ給ひ

題しらず

藤原景経

さそふらん嵐に山やまて外に見ゆる月に簾を

藤原基任

月をこそいまさらの色とかくす簾のうちにかゝる簾かな

正安三年八月十五夜内裏十首歌

暁月簾　左大臣

まちわびてかくれゆく月のまくるゝ簾の外にあけぬるまの光

嘉元百首哥よミてまゐらし鹿

入道前太政大臣

花すゝきかれはのなかにもえけは秋萩かもとのはにそ鳴也

前大納言為世

さを山田のいほちかき秋萩にねぬ人ふしと鹿そなくなる

百首哥よミてまゐりし時

二品法親王覚助

秋萩のしほれつゝなく鹿ハ人めもなきてや妻を恋ん

田家鹿を

権僧正桓守

やま田もりしつかにねさめのあはれしれやまさとなれぬ鹿の声をきく哉

円光院入道前関白太政大臣

よさむなる田中のいほの秋風にいなはそよきて鹿そ鳴なる

山鹿といふこゝろをよませ給ひける

法皇御製

あくかるゝあさけの風のあはれをも秋ハなく鹿の声そきこゆるところ也

嘉元百首哥に鹿

萬秋門院

なく鹿の声もきゝそふ秋風の秋やまさしぬらん

題しらす

平宗泰

あはれ我月のくもれはあはさてもさそのれ待と鹿や鳴らん

前中納言季雄

またふみなることをもつくりて、となき風の音の外といふて　九

藻壁門院少将

思ひかねなかめし袖の風にもや萩の下葉の色もかはらむ

弘安百首歌よませ給ける時

亀山院御製

ちかくなる萩原の風に萩原の下葉の色もみなかはりけり

物名

従二位家隆

あきの風まつより先にさきかよふ萩の下葉の色そかはれる

蓮生法師

庭のおもに萩の下葉のちりしくはいつもよりやさしくかはるらむ

平宗宣朝臣

山里は秋のはしめに萩のはの露のみそおく

屏風歌

前大納言為家

秋の野の萩のしたはのいろかはる

人麿

秋の野の萩のさかりは人もみな

千五百番歌合

後鳥羽院御製

物やおもふ雲のはたての夕暮に萩の下葉の露

百首歌の中にまことにかきつけし時

権中納言為藤

秋風にきほひもやらぬ朝霧の山もとよりもはれわたる今

霧中鹿と　円光院入道前関白太政大臣

秋山のみねとをき風の夕霧にきこえて鳴なる鹿の声

霧中鹿を　藤原家秀

霧はるゝ山の尾上にみわたせは秋色にのこりてさく旅なりけり

大江頼重

花霧にほひて暮るゝは朝よりも花の紅に霧をこめて

読人しらす

小倉山麓の原のきり風ふく霧に富士もきえて見ゆるかな

百首歌よみてたてまつりし時　法印定為

見わたせは霞にこもる花の色も霞をそむる夕くれのさと

弘安百首歌よみてたてまつりける時　前大納言長雅

立こめて見わたす方は山のはもきりの籬に残るあさかな

題しらす　永福門院

うす霧のをちかた人も山のはのゆふへの秋霧

文永二年八月十五夜五首歌合に来秋月

とふ人も　権中納言公雄

さえ入風もむかしにかはる嵐山のおちくる月そまれなる

光俊朝臣よませ侍りける百首哥に

藤原隆祐朝臣

夕暮は月待ともなき雲風よりそ秋の山風
みる月影のこゝろをもしらん待ゝとのちにきて

藤原實方朝臣

あはれにもなく人こそ月をまちすして独ねなきをとふゆふくれかな

題しらす

前大納言為家

秋の夜は峯ゆく雲に出やらて待かねてさよふけの月

入道前太政大臣

まれにのみ山をは出て行末の空への松にかゝる月そいさよふ

伏見院位におはしましし時月十首哥めされし

山中に

前大納言為世

なかき夜は宿にはいるも月影はまつことなしに秋の夜の月

月哥の中に

民部卿實教

山風のかれはやそれとみてまされは猶よいつる月かな

前関白太政大臣家經

そやられ猶まよふ山もりの風さそふ空の月に雲なふきそそ

信實朝臣

なかき夜のしはしはまたぬ人もなくて雲をはらふ山風の月

堀川太政大臣

久かたの天もさやかに経らる月の光にみゆるや秋のさかり

性助法親王家五十首哥に

法眼源兼

わたつうみの月はさやかにてたゝよふ雲に秋をもなかめ

題しらす

紀淑氏朝臣

瀬をはやみ絶えせぬ川よ影みてひろくさやけき秋の夜の月

津守國夏

あまの川雲吹はらふ風そとく神なひ山の秋の月かけ

平貞文

雨はれて春日のおくの峯の松にかゝれる月そかはらて神のみかけ

二条太皇太后宮摂津

春日山みねの嵐に雲晴て照月影をそうつす川なみ

洞院摂政家百首哥に　月

信實朝臣

雲はらふ嵐の末の秋の色にとりそへてける月そさやけき

嘉元百首哥にこくまつ月

津守國冬

天の川よりくる雲の通ひちと成夜の月の秋にかゝりぬ

百首哥よみ侍りしに

前大納言実俊

月残て千里の外を見るよりもさそ明る夜のせさき

閑月

権中納言為藤

秋の夜は宮のうちしもゆきかふ人もなくて月の影は

中務卿のこゝろえたりけるに西園寺にありけるにまし

ゆかりの殿上人つれて勧修寺の女八月十五夜の月おも

きかりけれは中宮の御かたへまいりてよみて侍る

従二位

永福門院

こよひしも雲井の月も光そふ秋のなかはをおもひこそやれ

返し中宮にかはりてよみて侍る従三位

今上御製

むかし見し秋の〻山に月かけをおもひいつやと昔なるらん

續千載和歌集巻第五

秋歌下

月不擇處といふ心を

大納言經信

名に高き光にめてし秋の月はいつれの里もわくとはみえし影しらし

鎌倉右大臣

月見れは衣手さむしさらしなやをはすて山のみねの秋風

嘉元百首歌奉りし時月

入道前太政大臣

清くともおもはむかたにやとかし山の月より秋の風やすむらん

民部卿實教

旅行人のたえまもや秋の月影をすくす手も乱るとみゆらん

月の歌中に

前大僧正實承

有明てゝいつとみるへき老らくの身の行末月そ知らん

題しらす

あはれみる影もなかりつ有明の月のさやけきむしろ秋の夜を知らん

百首歌召されし時に

法皇御製

おほかたの秋の寝覚もあはれなり六十路あまりて山の端の月

前大納言為世五十番歌合に秋夕といふ事を

よ紀月　　　　前内大臣重

ゆくすゑをおもひあかしのあかつきに我身にちかき風の秋の月

こゝ題しらす　　　　民部卿資宣女

おもふこと住こしまゝの袖の上に月にしくれぬ秋そしられん

　　　　後久我内大臣

ありしにもあらぬ昔のおもかけはかはらぬ月にしのふ名残さへつき

ゆふ付

建保四年後鳥羽院より百首歌めしける

　　　　参議雅経

秋風の月吹さえてひさかたのそらに物思ふよはの袖かな

百首歌中に　　　　殷富門院大輔

世中はうきをつくしてもあはれ月はすめともしらぬ月ならなくに

左京光俊朝臣よませ給ける十首歌中に　　　　藻壁門院但馬

極て出宿といはなくに月にそあはれもかなしき

題しらす　　　　民部卿家教

秋ふかき霜になりぬる我袖の月涼しくそともなり

　　　　前僧正公朝

いつも月みしまゝになかむれとはるかに後夜をそ

　　　　平時遠

人とはぬ山の秋風さむしろに衣うちそふ月の夜半かな

かきりなきいろのみそへて明石かた霧やそこなる夜半の月かけ
津守国道

百首歌たてまつりし時
かね門侍

さそふ風のさむくなきさの星はあれてよもの月のひかりのとをきかな

月の歌の中に
皇太后宮大夫俊成女

影そよ空はれぬ月のかけそゑそよりもなき世の旅の空さと
皇后宮

秋をまつ風のうへの宿もなく月もうつろふかけやとる

藤原光俊朝臣

あきらけき秋のこゝろもあまの原月のかけやまのはにいりかたの月
権中納言公雄

露霜のをくれぬほとのゆくゑ見えつゝ月のかけのみのこる秋の夜の月

建長元年九月十三夜鳥羽殿五首歌に
水辺月
前大納言為家

ゆく水のむすはぬほとは長月の月のかけのみ秋風にしてひさ

仁治二年九月十三夜右大臣家十三首歌の
中に月前雲
源有長朝臣

月はなほさえゆく山の風をさむみのこるたかねのこすゑ雲
藻壁門院少将

題しらず

みむろ山こすゑやまれになりぬらんかつらきのさえぬ月そさやけき

殷富門院大輔百首哥よミ侍りける時月

哥とて読侍る　前中納言定家

前世ハたちちそ世と月残ぬこそ秋もなかはおしけれ

河月と　平維貞

箱井川氷も秋ハいさしらて月すみわたる水のしら浪

嘉元百首哥よミてたてまつりしに　前関白太政大臣

風さそふすそのゝ空にさためなく月にかゝれる嵐の山

從二位行家家にて小野光御位名社十首

哥合に江上月　前大納言為氏

よと河のみなとの秋の夜更てえにけり月の景

寛元二年九月のころ住吉にまいりて旅明月といふことをよみ侍る　西園寺入道前太政大臣

住よしの松の木のまよりなかむれはかはれと思ふ秋の夜の月

建治二年九月十三夜五首哥に江月　前右兵衛督為教

かつらえのけしきかはらぬ江みましの光の秋のよの月

秋哥の中に　寂恵法師

老の重ハむかしのよはをおもかけて月やおもふらん
平泰時朝臣
くもらぬ空ハかはらじ毎夜は夕月やみるらん
百首哥よミてまつりし時
権中納言為藤
浅月のかけしきりにてわしる毎秋風ぞふく
後二条院御製
清月とおもひきや風の色まそみえ
にきたる月
百首哥中に
中務卿宗尊親王
あけはつる空にもみえて風のたよりの秋のよの月
道助法親王家の五十首哥に毎夜月
前中納言定家
さてもまたおきわかれての袖の露を毎夜の月はかはらずもみん
百首哥よミてまつりしとき
法印定為
ゆくへなき波をわけ入る月はくもらでむなしく秋のうみ
左大臣家詩哥合に月前眺望
丹波忠守朝臣
あはれなる雲のあなたの月は限りもみえぬなりけり
権大納言冬教

住吉の松のしつえや霞ぬらん雲のいつこに月そすみける明石の浦波

山階入道左大臣家十首哥よみ侍ける湖月

津守国助

なかめする心のうちも秋のよのあはれはふかき月やもる

故郷月といふことを

観意法師

あれまさる昔の家のあるしにはやとる月のさやけき

月

住吉社にて百首哥よみ侍ける中に海辺月

前大納言為氏

すみよしの浦のなみちにかけはれて月もわたらぬ秋の夜の山

家五十首哥よみ侍けるに山家月

入道二品親王道性

さえて吹峯のあらしにさそはれて木の葉とゝもにあらはるゝ秋のよの月

尊鑒法親王

秋ふかき嵐の山の世々かはらぬ月影きよくすみのぼるらん

前大納言為世家よみ侍りける

法印長舜

あはれなる山のをちかたの雲はれてふもとの月のすむ光かな

嘉元百首哥たてまつりし時月

法印定為

九

多くすむかりやのうち秋の田のかひやゝ今よひの月哉

今上位につかせ給ひて後護持僧にて侍りて二百首よみ侍りける中に

慈道法親王

今よりもまたそみるへき九重の雲井にすめる今夜の月哉

禁中月といふことを

春宮権大夫有忠

いにしへもやとりし袖にしのはれてそれとみつる雲の上の月

二品法親王家五十首歌に同月

正三位為實

百敷や霜やはらひて葉分の月はかけそみえける

月の歌の中に

式部卿久明親王

むかしみしやとのこゝろは遠けれとかはらぬまゝの秋の夜の月

前大僧正仁澄

秋の夜の月はいつくもわかねとも我やとからや袖そぬれけれ

鎌倉右大臣

さよふけてなかはたけゆく久方の月ふきかへせ秋の山かせ

津守國助

河風にうつる明の月をまちかねていそく舟よりあけぬるかはに

永仁二年八月十五夜十首歌講ぜられし時

山月聞鐘といふ事を

為道朝臣

暁の鐘のひゞきて行山のはちかきまて見ゆる月かけ

題しらす　大蔵卿隆博

明かたの鐘のひゝきは峯の寺のそらにあけ行月をみるかな

大炊御門太政大臣女

夜のまにはなほきこえくる鐘のおとにさそはれ出る月はやまのは

百首哥よまれ侍りし時

前大納言俊光

あけぬとやきこゆる鐘のひゝきにも旅の枕のうへに月をみるかな

前大納言為世

行かなる声をはなれて月はさしのほりても[illegible]

海上月を　素暹法師

山のはのかたにて出つるそとは海のおもてに月はさしける

月の歌よみ侍る　恵慶法師

月のすむやとのあるしは雲ゐにもひとりはやみのうちにけり

題しらす　藤原実方朝臣

雲のゐる峯の嵐にはらはれて月はのこらすはれにけるかな

後鳥羽院御製

袖のうへにたれてはらはしおくれぬる松のはけの有明の月

為道朝臣

いくとせかなきさかひの秋の夜に月みまゐりのやとをさそと

藤原景綱

あはれさくあらむことは数しられ月よりつきぬ秋の夜の哀に
なきむしの声とともにして

源頼

草むらの風そこすみて月のかけせやなく虫の声の秋のこゑなるらん

建治二年九月十三夜五首歌中野虫

大藏卿隆博

あはれそふ露むすひきて秋の野にみたるゝ虫の声をきくまし

題しらす

前摂政左大臣

此ねとたれかちきりもなき宿にまつとかこちて松虫そなく

百首哥よみてまつりし時

昭訓門院春日

まちてたに秋はさひしきみにしらむ松虫のこゑよりかなしき

前大納言為家に百首哥よし

従二位家隆

まつの来る夜毎の秋風にさそやうかりし松虫のこゑ
夕暮をまつ人ゆゑ

神祇伯顯仲

夕されはよりきこゆりと風葉そよく風に音そきこゆる

弘長百首哥たてまつりける時

前大納言為家

きゝしよりさえたといふ母としかりおひとさそてはなとなれ

閑居といふ心を

今上御製

霧ふかきとまさむ風の秋のきりにしらさしふかき月そのこりける

題しらす

民部卿実教

心よりやふさまえるかんかきりてしはとめぬ波の音のまさむしく

春宮大夫公賢

いくよまて空やかゝみのはつかくにさえて霜のおきむかひかねて

前大納言為世よませ侍し三首哥に[illegible]

藤原基任

霜むすふあさちかうへの風さえてしくれし空はのこるともなしかたなん

題しらす

よみ人しらす

冬かれのあさちか末葉の露むすひてしもおきて秋をまたしのはん

弘安百首哥たてまつりしとき

後九条内大臣

おきあかす風霜よの床もさむきにてあきまよふ外そ月はさひしき

土御門内大臣

夜て出を

虫の音はかれゆく秋のくれかねて住よしのわかれさとの二筋

百首哥よみてまつりし時

左大臣

下葉ちるまのゝ紅葉吹をろしこのさとならて嵐なるらん

家に百首哥よみてまつりける秋田

皇太后宮大夫俊成女

をやまたのいほもる袖の秋の稲葉に露そをきける

田家擣衣を

為道朝臣

衣うつ音のかりほの庵の稲葉にかよふ夜さむなりけり

家に七首哥合し侍りける風前擣衣

光明峯寺入道前摂政左大臣

夜をさむみ風の音にも嵐の山の木葉に秋やそふらん

里擣衣を

法眼兼誉

秋それとわきてことさら風さえていたつらにしも衣うつらん

題しらす

藤原顕盛

おそ秋のかりほにさむき秋風よさらはやこゝは衣うつらん

百首哥よみてまつりし時

内大臣

有明の月もよなよなさむき山風さむみ衣うつらん

秋哥中に

参議雅経

渡舟やきりの籬にへたてられてあまのとま屋に寄らん
嘉元百首哥たてまつりし時旅宿
前大納言俊光
とふ人も夜はの家ゐのさひしきにむしやなれしかるらん
関旅宿といへることを
今上御製
いくらの秋風さむきさの衣宿の民のおもひやられ
弘安百首哥めしてたてまつりける時
入道前太政大臣
長きよを過しかねたる人ならや風はらひて衣うつらん

海邊旅宿を
大江貞重
秋さむくなりゆく海のあま人もたちかへるへき旅寝なるらん
前大納言為家人々すゝめ侍りける日吉社
五十首哥合に湖邊旅宿
前大納言為氏
さゝ波やしかの浦風さえし夜の衣うつ風さむしてねられぬよは
嘉元百首哥たてまつりし時関旅宿
皇太后宮大夫俊成女
おもひあかすいそのかた枕まて夢ちもとをき打旅ねは
旅宿夢といふことを

伏見院御製

秋ふかきねさめの床にきこゆなり衣うつなるかたのねの遠

遊義門院

うちわふる夜寒の衣のあはれをもしらするにも秋更ぬらし

百首哥たてまつりし時

忠房親王

よもすから月みる人の袖にやおきそひて打衣かな

擣衣をよめる

源邦長朝臣

多れゆくかにふけて月に霜さむし人の衣うつなり

従二位宣

長らへてねさめの床の音のまた秋のきぬたの友となるらん

百首哥たてまつりし時

前僧正雲雅

宇治川や岸のこなたの影に月をまつらしあさのさ衣

弘安百首哥たてまつりける時

大蔵卿隆博

袖の色の露もみたれて秋せにたれに又人の衣うつらん

亀山院御製

ゆふくれの秋の日数もをしへつゝ霜のよもすから衣うつなり

性助法親王家の五十首哥に

法眼源兼
志らくの秋のよろ霜月さしていくとせしほうつる容なる

久安百首中に　皇太后宮大夫俊成
山川の水のみなかみ尋ねてそゆかしとそみる志らきくの花

延喜御時菊合に　藤原興風
ちりそめて花も紀時のきてみれは川の岸文のおしてもみえ丸

籬菊を　二品法親王覚助
秋の紅節は霜のなからしかいおもひしりかま志らきく
菊の枝しつかくさして月つ世をそへ分

今上御製

やまと人の千とせの秋をかさねても君かためとそうつる白きく
御也し　法皇御製
ほしまつる月の菊の花かさゝれにしかたみの老の乃

重陽のこゝろを　新院別当典侍
ちきりすむ秋ともをれて九重にいくよまてなみつる菊の今日の月
題しらす　永福門院内侍
ふりぬる旅の日数もおほく池をとりかへそそ老の色きく

百首奉てまつりし時　前関白左大臣　押蔵
我秋と方をもとして長月やまきのくはも花の粧まさり

題しらす　　平時数

あき月も葉のくもるに影薄はのなこり秋のなかめ

祝部成久

しく露のそむるはなみたなれは木葉も秋の時雨をやまつ

洞院攝政前左大臣

住の國のくさの葉のたつ時雨にまさるへしふりそめし道

前内大臣通

そめつくすみとりもしろの山風にこの葉時雨も露もなかりて

紅葉一樹とみるかなと

前中納言經繼

いとゝまた涙にそ染るなりけらしおもひやまぬ時雨なるらん

題しらす　　權中納言爲藤

あきはこのみちのゆふへの山の木葉もちりしかやおもてかさらん

百首歌よみてまつりし時

關白内大臣

露時雨いかにせくそめてのち山風にこの葉の色もなかりけん

前參議雅孝

さそはれぬ雲のこころしいかはあへてふかきのきの木葉

秋歌中に　　權中納言公雄

とくかめもしくれにをくめ[illegible]時雨のつゆのたもとやまさるらん

従三位為信

秋霜のさゆる山風紅葉はにちりかふ程やもろくなるらん

家歌合し侍りけるに紅葉を

修理大夫顕季

たかさごの山がくれなる紅葉ばをあらしの風のたよりにぞみる

題しらず

清原元輔

紅葉ゝ風にまかする秋は井せき川ながれてもみえけるかな

貫之

みむろ山時しらぬまで紅葉ばの風のまにまにやちりまさるらん

水上紅葉を

従二位家隆

立田川みねのもみぢのちるからにそこさへ水の秋ぞみえける

嘉元百首歌たてまつりし時紅葉

贈従三位為子

たつた川岸の秋をやしらすらん紅葉ながるゝ峯の嵐に

題しらず

藤原為副朝臣

うつりゆく色をみよとやつれなくてときはのもりの秋風

新院御製

紅葉ちる庭のもみぢはのこれども秋の日数はとまりもせじ

永仁元年亀山殿十首歌に

川上暮秋

左大臣

弁海のつれてなかきこまれに葉ものこらぬ秋の名ぞみなり

従三位師継

いくとせか秋のならひの弁川にうかれ志つゝいさよふなる

暮秋暮といふ心を

伏見院御製

志らくものたちゐる秋の名残とみよ白菊の花

正和二年九月尽日十首歌に暁惜月

従三位為理

ゆく秋の名残もけふの時なれやいつもかはらぬ有明の月

後二条院御製

いそまくら移ひ絶くいさよすゑさこよひ秋ぞ別なりけれ

嘉元百首歌よみて奉りし時九月尽

前大納言為世

なみだよりかをしらで行秋をなげきつゝ秋ぞくれぬる

久安百首歌に

上西門院兵衛

あさましや老の後はをしみこし秋の別をなげかざりけん

後京極摂政内大臣に侍りし時家にて十首歌

よみ侍りける秋

前中納言定家

暮はてぬ秋のなごりは流るゝ水のながれも志られけり

續千載和歌集巻第六

冬哥

時雨知冬といふ心をよませ給うける

法皇御製

しくれ行空にも音す秋の月のかはりしあとに冬やきぬ覧

山時雨

院御製

いつしかとけさは時雨の音羽山秋をのこさすちる紅葉は

題しらす

従二位家隆

秋の月しくれてのちもまたるゝはなほ冬のはしめなりけり

後一条入道前関白左大臣

はるゝ夜も雲井を秋の月時雨かけにある時雨は

中務卿宗尊親王

ふりかはる縦をそて見し冬よりはぬるくしくれぬいその浦風

弘安百首哥たてまつりし時

入道二品親王性助

かきくらしたえまも見えぬ浮雲はよそにしらぬ時雨ふるなり

百首哥たてまつりし時

権中納言為藤

定なく猶しくれそまさる浮雲は風のまにまに山風のあとしに

冬の哥中に

権中納言親房

よはやてかけしらむ山のはやきえゆかん雲のさえてはあらしそのこる

後徳大寺入道前太政大臣

あききよき秋の光の空の名残にてまちたえぬ村時雨かな

春宮大夫公実

くもる風の上ゆく山のはなからむ村雲そめて出る月かけ

前大僧正慈鎮

しはしこそさそはれて出るうき雲の行へはいつこ山のはの月

月はこのくれからをとこそてよ見れ

法印行深

秋葉の色こそあらしの山ひとつ手向の月の影そさやけく

百首歌たてまつりし時

前大納言俊光

雲のゆく嶺の時雨て嵐にそしはしみてはぬらり

落葉を

参議公明

秋は月もやとりし小山たえて雲にさそはれちるもみちは

亀山院せりうに御幸ありて三首歌講せられ侍りし時落葉を

前大納言為世

あつまりしこのはなかも山おろしにさそはれてちるこの葉かな

秋の中にくもみちのちりのこりけん

ちるをみて秋の月とはしらぬやみちさへまよふ風のあしたに

道命法師

嘉應二年十月住吉社歌合に

関路落葉　前大納言隆房

あふさかの関のすきむら吹風にきえてもみちはちりまかひつゝ

亀山院御製

たつた山みねふく風にさそはれてあけの空にも紅葉ちるらん

弘安百首歌たてまつりし時

権中納言公雄

かつらきやたかまの風はいつのまにみちもせく川の秋をそれしる

寛元百首歌よませ給ひける

後嵯峨院御製

吹嵐の音もかはりて冬はきぬ秋のなこりや惜しむらん

百首歌たてまつりし時

前大納言俊光

霜さえて冬ともみえす梢にて時雨もをちて木のしたに

秋の月のかけにしら川関やかよふらん人々十首歌

よみ侍りし時冬庭寒草

権中納言為藤

庭の面はあさ霜の置そふ草の原かれてもさきぬ冬の夕くれ

山階入道左大臣家十首哥に寒草霜

津守国助

霜むすふ尾花か袖の風さえてはなすゝきもはや枯之
冬の野中に

平政長

めくるよりなかき山路は秋もあらし吹ても長の月のかけの風

百首哥よみてまつりし時

右近大将兼季

吹風もあけかたちかきそらのあさちか露に月そさやけき

題しらす

源清兼朝臣

をく露のみかくれまさりて見ゆる程尾花かすゑのあさちふの月影

従三位雅家

秋の夜ハ更ゆくまゝの小露にやとりて月そかたふく有明の空

法皇御製

あらし山さとの嵐は音ふけて有明の月そこほりはてける

後二条院御製

草のはにみたれて露ハおきなから秋ハまたゆく月影

百首哥よみてまつりし時

権大納言経継

浅ちふにしけき秋風吹まゝに露そやとれる月影

西園寺入道前太政大臣五十首哥よみてまつりける

時しりける　　前中納言定家

氷ゐる比良の高ね風ふけゆけば汐干の浦に千鳥なくなり

西園寺入道前太政大臣

さよふけて霜のおきゐる河風に千鳥なくなり月の夜すがら

百首歌よみてまつりし時　　内大臣

浦つたふ波にたぐへる風の音に千鳥なきて月に鳴かなり

題しらず　　権大納言実衡

冬の夜は寝覚めにたぐふ風の音に千鳥なくなり月にさえつゝ

宝治百首歌よみてまつりける時浦千鳥

冬の夜の河瀬にさえて月影の河風さむみ千鳥なくなり　　兵部卿隆親

西園寺入道前太政大臣住吉社にて歌よませ侍るに百首歌中

津守国平

冬の夜の浦の松風さえぬらし月にも千鳥鳴く也

平重村

浦のうら風に千鳥月に鳴なり

長和元年内裏十首歌に千鳥を

大炊御門右大臣

さ夜ふけて河風寒く夜風よりかすかにして鳴千鳥かな

題しらす

和泉式部

ことゝはゝみするとなるよりかはりよしもかなしの明の月

藤原敏行朝臣

雲のゐるみさける月の明かたに千鳥の声をきくかな

為道朝臣

いかならんともに人の寝覚して目さめてなく千鳥かな

水鳥を

さゆる夜は風わたりける池水にのみおもふもこほるなり

中務卿恒明親王

前中納言定房

山川や岩にせかれても風のさむさにたえこそ通へ

鴛鴦もとこうきをいとはせてなく

今上御製

岩ほとゝ山をさむしと鳴つるゝ水鳥のなかめすまさんやまのゆふくれ

題しらす

旅ねの夜半風寒えてなみのうへにまちけるよりまつ月影

従二位宣子

浪のはいそにしほやみちくらん山のはの月の影そのこけき

従二位行家

如願法師

和歌の浦や水のうへ氷とまりにたちかへるらん

平時元

いさゝ川せきこほりもまさるらん風にこほれる色さむく吹かへり

前京重経

ちらまする波にこほりてみなと江の芦の葉さむし旅ねふね人

弘安百首哥たてまつりける時

入道二品親王性助

さえわたる風のあらしの色はみえねともしみて氷よりかへる風音かな

氷始結といふことを

後二条院御製

あさまにはいさよふ浪をたゝへて八十うち川は氷しにけり

白川殿七百首哥よみ侍りける網代といふことを

前大納言為家

あさ霧のおちの風に音たてゝまたきよにしらぬ網代木

弘安百首哥たてまつりける時

入道前太政大臣

さえまさる冬のさむさやくもるらん月のよ風の風に霜おけり

百首哥奉りし時

忠房親王

霜の朝のはの葉やちらんいまは世もて末の霜に

冬哥の中に

前権僧正雲雅

夜半に霰こほれてこほりのはて袖の氷やとけぬらん

前大納言為氏

あらし吹すその日かけさえくれて雲のなかにそ霧る色

弘長元年内裏三首歌に晴雪

雲かへるのこる明ぬ月もみえてかつや霞の峯のさえ風

哉しらん　藤原為顕

夜のほとに降りにし雪のしきたへのますて見えけり山の端の白雪

院御製

三日月はあらしつらん風寒み日も今山をさされは雪ふりにけり

澄覚法親王

はれそめしふもとの里はくもりても

前大納言為世よませ侍し春日社三十首

歌中に　津守国冬

野も山もみなうつもれてはてにけりしつか家ゐの雪の明ほの

題しらす　平時有

それとしも残る山なくふりつもる雲井にかゝる峯の白雪

冬の比雪ふかゝりし給ふ時

前大僧正道昭

風さむみとやまの雲のはれつゝきえしゆく山ふりつむ白雪

冬の歌中に　法印定為

うちなひく山嵐のあらしもはけしくてひとつにふりつむ白雪

後二条院御製

いとまこそなかりせはみちのくの吾妻の雲のはて

祐子内親王家紀伊

あさのゝ花ぬれし雨の名にこそやましたの山

中納言家持

河上の川かは音なくしも冬のすゑのきえしをと雪そふりにし

皇太后宮大夫俊成

清見かたはる大空の雲のゐるをもかへるとそなりまん

雪満家といふ心を

法皇御製

まかきの竹のは清みれなから雲のうへのは家をもゝしのふらし

題しらす

道覚法親王

咲ぬるとみし吹ぬまの山はに雲かゝりけるゝ清見か吉の雪

嘉元百首歌にてよみ侍りし時雪

前大納言為世

高砂の尾上の嵐吹落てたゝ吹ぬ雪と流るの松のしら雪

後九条内大臣家百首歌に嶺樹深雪と

いふ心を

藤原隆祐朝臣

雪うちはらふともたゆみ今はあらしにしつえとうつるねの松

松雪を

津守国助

ミ人もまれになりにし忠信ふかりれなゝる雪のみ卿
雪ふりしあしたにかん侍りける
前大僧正禅助
ゆきまこつね跡たえてとふ人もなひの峯の松の白雪
題しらす
津守国助女
さきそめの雪を花かとしたはくもさてなれしのこほりけるかな白雪
大蔵卿重経
ちしほさく花とそみる白雪のなかれよりきしのこの葉の梢に
藤原顕盛
ちりかゝる花とみえてさえくる庭の風ふくからさきに雪そふりける

一

西行法師
よし野山さくらにかへる雪ふかみ花とみえてやおもひいつらし
相模
なかめやる山のはかの白雪は松にのみありしかとそみゆる
大江政国女
山さとはゆきをとふ人はしとしもなくてよみちも雪に埋もして
永仁二年五十首歌よみ侍りける時雪を
津守国助
ふゆされはあさはむまの雪の上にあとつけてゆくしのゝめの風
題しらす
藤原宗行

冬枯のあしまにさゆる波の音もおなしからくうつる浦風

浦雪混沙といふことをよみ侍りし

前大納言為氏

浦風にたつとはみえて雪のつもれる浜の真砂地

百首歌たてまつりし時

津守国冬

冬さむみ河辺の風をさえけらし汀はとくる雪の志ろ波

雪しらぬ

あらしふく

野宮にてゆきのふりけるに侍りけれは

雪にふみまよふ人こそありけれとわかれしのちにたえしとそきく

皇后宮

百首歌たてまつりし時

二品法親王覚助

津の国のあしのやへふきうつもれて雪ふかしともしらぬけふかな

雪の歌の中に

藤原信雅朝臣

まつはふる枝もたわみて昨日よりけさの葉かへにやかけての白雪

西山にすみ侍りける頃雪のふりけるに

慈道法親王

待てしはし代々の跡をも尋ねみむ昔の人のふみし白雪

嘉元内裏九首歌合

前関白太政大臣

あかつきやさけ風さえてみちのくの雪のあけぼの有明の空

延政門院大夫

さゆる夜の風はそよともせて竹のはにしたはにこほるあらしの雪

正治二年十首歌合に暁雪

従二位家隆

かねのおとにいさやあけぬとみよしのゝ里はおきても嶺の白雪

積雪と

正三位為實

いくとせかつもりしやらむ山雲もかさなる嶺のしら雪

山階入道左大臣家十首歌合に星雪

源兼氏朝臣

すみのぼる今宵の雪にさえてこそあまの星をそれかとぞみる
影しらぬ

三善遠衡朝臣

ゆきつもる千代の庭の雪はちるほしの光きえみる

権中納言兼信

こよひはさゆるみ我かともゆをかへて庭の白雪
雲のかりかゝるに光みえて
とりて行く夜への月

法印長舜

かよふらんいさやしらゆきのふかきよにかへるなのかん

弘長百首哥よみてまつりし時

衣笠内大臣

志れかゝるをそへのかさゝれきそめしのまさき風白雪

百首哥の中に

前大納言為世

あさちふのかきねつゝみとなれかへりとのさかの志も

嘉元百首哥よミてまつりし時

入道前太政大臣

志りそめしかせのけしきもまたなれぬなかのみちをもかよふらん

題しらす

津守国夏

白雲のかゝるみねをたえぬともつきのさそのこまかね

百首哥よミてまつりし時

昭訓門院春日

志りそめていまさらみちのみつのうきかきのまちもなし宿

鷹狩の心を

後宇多院御製

みかりするかりはのをのに風さえてとたちのしはに霰ふるなり

正治元年新宮哥合に冬夜恨

前中納言定家

月に見なれて冷えぬみわたしつきさへさむしろにさ遠

百首哥よみてまつりし時

入道前太政大臣

雲のうへに移りし月のすゝしさの秋もわすれて

歳暮の心を　従二位氏久

名をしまぬくれは残れるとしもなくにのこる日もなし

前左兵衛督教定

月日のみたゝいたつらにゆきめくりまよひてすくる年のくれかな

左大臣

ほの月日はかくて過るもおしけれとくるゝ年のわかれかな

平宣時朝臣

いまはいさめくりあふまてあかれゆくとしのなこりをおしむなりけり

園光院入道前関白太政大臣

思ふことなかりし後のよの中はいくとせ月をみすてきにけり

宝治百首歌たてまつりける時歳暮

法印定為

ゆくに先月日は先立れさそのこなたにいとおしき年のかたによりける

八条院高倉

題しらす

いたつらにすくる月日はおもほえて花見てくらす春そすくなき

仁和寺二品親王守覚

ひとゝせをなかめつくせるあさとてにうす雪こほるさひしさのはて

續千載和歌集巻第七

雑躰

顕密の教法の心をよませ給うける

法皇御製

かきりなき 仏のこゝろ てらせとも みれはひとつの
えにしをそ 風のまにまに まよひきて 舟をつみて
くもきよく くきみちまて ゆくすへの これをきゝつん
たかそこそ 三世の仏の そこはなき 宮にとゝく法の
さかへしと 七の宗まて 八重の雲 仏のみちを
たよりして 月とのみそ たのもしき 志きはなれとも
まよはされ あかぬ心の 夢のうちを あかしゝより
ふりのまゝ 八年の秋を 世々と照せる
ひかりそ 常とのみ 月あかく 鷲の山の花
谷のおも 八のりを まことそ 方人との法を
見ゆるもく 花のたえ 末法井に 三のぬく
ほとへきて こゝ風ぬそ そうまれ あまねく照を
吾日域の 本の国そ まれつら 法のやまと
こともの かかやかれて やすらの そのまてなく
ひさしくそ 国ともしら めくみそ 終をまちれて
たとせねへ えらのめ 二のまれ きらのそうね

うごきなく　萬代かさねへき　君しこそ　きよくおさまれ
世のうちに　思ふ人毎を　みまもり　世のうへひと
千年のみち　嵯峨のおち　ことしあらは　民の家ごと
みなとひて　万代あへき　わすれぬ　水穂の国そ
ゆたかなるへき
かぞへしるこ
代々たえぬ流れはしるくとつへきて　河う絶えて今日の千の国
都おのかうこ　あかん人あらん
たのもしく　岩はそれぬ　とこしへて　君はおれども
ほそくとん　いはくまがら　松くえを　きよ河くりと

わかきて　花にほふ　行人の　萬代みえし
ことはりの　思ひ知るを　いましきりとす

夜并

嵐ふく風さそふ心ありなは幾代の山はまちてまたきかるなる
聞しらん　寄人
言はりは　神代の昔　いかなるし　志ぐれ思ひ
こころのまの　君のつてまて　なほうらう　多少をはらく
ありてと　守けるよし　わとのや　かきのすこそ
山高く　千代経とし　大和の国は　やまとみかし
秋の夜の　御しるしき　あかしかね　うつへそれく

ゆきふりに　かへるはさかく　みなとに　ねよのこゑ

ひとしれぬ人　いへしらて

あと川にまよひてさすゆく立春の朝ひとへにさしこひもなきを

読人しらず

山しろの　春風もやこゝ　春されは　花さくらん

秋されは　冬こもりひ　かひまなく　川にれのに

かくれ世に　とらつまに　まと世に　こゝろにまに

わかなも　はしまらん　まつ代まてし

久安百首哥たてまつりける時

花園左大臣家小大進

君か代を　ゆきまさりては　花さかく　こゝろをゝを

こゝろゝとの　ひとしれぬ人に　さかりしは　よしのれの山に

はるさきの　とゝまつきに　やまとの　葉さへにほそ

見ゆらんゝ　さゝ千代にの　こゝろの　松かゝと

河とに千　いのちかりの　きかれいに　あきのゆらに

こゝにかた　のこる命に　あらそ海に　またきはゝれ

あかりは　これたにらを　あかれ川　百代はてく

ときもえら　よひもかと　いまとにし　あしまのこの

さしかくる　こゝいその井に　立のまり　これはさかくもり

ひとりのみ　あくる[illegible]に　きこし様は　流りつゝ[illegible]
[illegible]　[illegible]　ちりのひ　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
いかにして　代ゝを重ね　[illegible]　[illegible]
すゑの世と　みえならに　[illegible]　[illegible]の
[illegible]　[illegible]いそく　[illegible]　[illegible]
[illegible]こそせめ

旋頭歌

題しらず

よみ人しらず

[illegible]すく[illegible]いつまで[illegible]しもなき[illegible]
の[illegible]花[illegible]しくさ[illegible]
[illegible]の山の[illegible]下[illegible]我[illegible]
これも月[illegible]人みえても

人麿

[illegible]の[illegible]の下に[illegible]それを[illegible]

かくしてみゆく[illegible]

藤原隆信朝臣家にて[illegible]
[illegible]花[illegible]ひて[illegible]
[illegible]して世[illegible]一句
[illegible]

皇太后宮大夫俊成

みよりこと知らしへにおいそてらしてまた代みる
かしきかゆかりなりけり

隆信朝臣

ありて身の身をもつてもたえられなくこそしのはれまさる
世みちのものかたりせん

折句詞

伏見院みこの宮と申時春宮坊和歌
て久しくなりにける御製をたまはり
花よりもさきにせむかしこのもとはきかれし

さそとおもふ上の句は上下同しくて

入道前太政大臣

これもまたひとしなのこれ尋ねてもさそひし花の跡ぞ
亀山院御時ひとひかへりてかこそおもふ句
ゆうかきとてとおほえしとかりよれてけ
うちよりける

前大納言為氏

二月まてはひとせもかれてかやへにほひうつるなきさにまさるこ
あちらの身をくみへしと上の句かへり

寄花

花されとちりてさそふもみえぬしてはこれをなにゆへにまた流れのこし

隆信朝臣身まかりて後としころかきをき侍ける
ものともを日ことにみてたつね侍ることを
かきつけ侍りけるをみてよみてつかはし侍

後法性寺入道前関白太政大臣

いまさらにひとりある身を思ふこそひとへになけきしれはひとりなは

物名

きのめ

曾祢好忠

二葉より我しめゆひし野へなれはつのくむさへにはるそ待るゝ

かつえ

花のいろをみしこそかはらねおもひはるをも待月さくらはな

庚申の夜数をかくしてよめる

伊勢大輔

年月も捨る身なれと世の中のいきうしきはおもひしられ
むかし

さくら

津守国助

このたひは花のさかりをとりとゝめむさくらの色もうつさん

とりくの花

隆信朝臣

あつまのとよりて見んみなもとも身のならひにもおもひしるらん

西院百首歌たてまつりける時あしかりを

皇太后宮大夫俊成

難波人あしかる舟やはてくくみえつゝそとむつましき

みえたき　　　　入道前太政大臣

さか木葉のかひあるかけを君とみてこそ神もしるらめ
やかてかれ　　　　左大臣

雨のこる涙やとて絶ていりにしやとの旅ゆく秋の月
さしてひけ

前中納言定家

秋山にいくよ入ぬる紅葉のにしきたちぬる今ゆふけて分
かへてまたり　　　　前大納言為氏

露ふかき外山の庵の秋ちくさの花のさきのそら
とはれてはさ一　　　　入道前太政大臣

星なれよ君の八千代の秋のしらけ
らしうれ　　　　太政大臣

おなしいまもちえしのひの里の八重のへとふれ道のみちのかん
みえたかれ　　　　津守国助

逢月にさしも命と思ふれとたのみてこそゆくさき
とうさきのの　　　　俊頼朝臣

秋ふかくなりゆく野への花のいろまてふる時雨て
ゆくさん　　　　実入道前太政大臣

さそふらん風さそふの末の露ゆくへやさしと時雨ふる夜の

誹諧哥

正月七日むつましき梅といふことを人々よみ侍けるに
たかきもとめて

禖子内親王家侍

春ことに尋ねてもみよ梅の花なれし人の香そする

題しらす

太貳三位

なをしかはいふ世の梅花日数かさねてにほひきぬと

柳蔭門前といふ心を

従三位頼政

青柳のいとくらへやとうちみたれ河原にかけし糸のふしそ

百首奉りし時

入道前太政大臣

ひとはまつ年やたえぬみよの月は霞の袖にかきて
まちわびきこゆる優曇鉢華よそにまつかれたつら
つれなさ

大僧正行尊

君か光風をもいとはて花のいろそとかりひらん

題しらす

信実朝臣

雨ふれとこよひも人のこゝろは花ちりやこゝろあらん

大貳三位

みそれふる春のこそこゆるや花ちる白雲と名をきみはて

読人しらす

音とくはゝ虫も秋をや鳴人のつらさはたえぬ身にて

弁乳母

山ちかき家のこゝろさへやまさるらんかたふく月の影はかりには

嘉元百首たてまつりし時

前大納言為世

嵐ふきさらす風音をきゝひさして風そ秋さむき夜ある名

のこといしに

正三位知家

長月の見るきさらる夜の秋かせやむかしもよそにかよふ風の音

名月にまりてさか山の月のかけ

康資王母

さか山の風おとしてやそのかみの袖の葉風まつとすき月かはる影と

物思ふ人の心の中にみつる秋そかはりて移りて

たまのをのかゝる世にありてあはれさりかれて

後頼朝臣

あさき夜はさすてあなたやとやちかつくもれ月の影え

ふけしらん

正三位知家

すかの原ひさいかの風のこゑれてたのむ名の萩

近原車懸と云事を

従二位頼政

のせてやかの秋のさくへのてかゝるときにしかりしてそらもかしこ車かな

題しらす
衣笠内大臣
ますらをのやまけのかきり打それて我もあはれ世は人そ知るへく
かりのことゝあとこそせく侍されはよるなか

和泉式部
とくはいはおもふなくなきましかりけるこの世の人の心まゝ

題不知
前大納言為家
からくへの野分の風のふきみたるこのことをそ世をもしらぬ

光俊朝臣
我なからそ人にかはりてきえぬへし ことはりそれは其みつのまゝ

道因法師日吉社の哥合とて紀哥をよみてく

思ふ事なりときゝてていひつりつる
俊恵法師
苦しみこゝろをしれいらとみゆるらん
かみ風紀しそ神もかゝれ

續千載和歌集巻第八

羇旅哥

みちのくにへまかりける人に餞しけるに

権中納言敦忠

ゆきてみむ人もこゝろのはてなれは
かへりこむほとをまつもかなしき

小野小町

みちのくにへまかりける人につかはしける
ひとのくにゝゆくへしられぬたひなれは
こゝろをそへてゆかむとそおもふ

壬生忠見

さすらへといふ浦はまちもやとはせぬ
よのなかにたゝはかなくもたひねをそする

貫之

みちのくにてはなをみて
よそにのみみしやまさくらちりぬれは
おほつかなくも花ををしまむ

恵慶法師

あきのよのつきみにいてゝたひねする
こゝろのうちはやまかせそふく

藤原清正

君をあんいのりてたむる旅衣まもれの神やあはれみるらん

めかへまかり侍りける人へつかはしきさまにはへけるかは
りける　　　　中務

きみかゆく雲ちをさしてゆけれはいのちのかきりあはれなるかな

天暦五年宇佐の使の餞し侍りけるにのこ
ともにかんな侍り　　　　藤原高光

露のとけかたをみるにもかへらむまてをせとおもひけるかな

源季廣下野守にまかりてくたり侍りけるに
侍りける　　　　刑部卿頼輔

めくらん命をまつむ別れは老いの身をもかなしかりけれ
ぬし　　　　源季廣

別れてはいまはかくてむ君かためきえぬまてまつほとそ悲しき
別のころを　　　　園城法師

義孝身まかりて後のちは老の身の別れされとも
蓮生法師出家してのちこゝろおもひこゝろひ
て侍りける女をおやのもとへとりつかはしけるとき
よみてつかはしける　　　　信生法師

かきくらし行方もしらぬ別れにはとまるもとまる心なりしを

ぬらし

蓮生法師

今はにはとゝまらぬ身なれともふる家は世に

同様寺にまゐりてかへり侍るに人々ゆきをつかはす
とて

前大納言公任

掃ふ日は紀にきえてもみえしかはあと見えぬらん
ゆきゆく人のあとをつけるとてすゝ侍る

馬内侍

みなれすとみる鏡のかけ子ても(?)そふとせしかなた

題しらす

土御門院御製

あさきりにまよふ舟の末はしらすまさに神やしるらむ

山階入道左大臣

ゆく路の跡子もなし たひ人のゆくへのみえぬ夕かな

前関白左大臣家

こぎゆくの藤のあまりは末もはてなくかゝりてあふ舟

平宗宣朝臣すゝめ侍りける住吉社二十六首

海路

前大納言為世

まさに見れはまたそこはるか風の吹はてぬにかゝる舟

題しらす

平氏村

はるかなる沖へさして漕舟はまた見えず遠ざかりつゝ

よみ人しらす

なか月も雲ゐに[illegible]
[illegible]清[illegible]

新院御製

[illegible]
百首哥たてまつりし時

権大納言定房

雲[illegible]入日に[illegible]月[illegible]

詠の中に　　津守国助

[illegible]秋の[illegible]月[illegible]

[illegible]侍る[illegible]
[illegible]

為忠朝臣女

[illegible]秋の[illegible]

題しらす　　藤原秀實

[illegible]秋の[illegible]

前大納言為重

[illegible]

旅泊の心をよませ給ふに

後二条院御製

かこの浦にありと出れは我心のみそたつ沖津白波

嘉元百首哥たてまつりし時旅

前右大臣

舟とむるかたもしらすその浦人もしられて世のつらさかなひとりそね

なきこの浦を

平親時

旅人もたえぬ日もなきあつまちのゆきてになれしたこの浦波

影しらぬ

藤原行朝

かり枕せし草のまくらも旅衣そてのかかれは袖そしほるゝ

惟康親王家右衛門督

すみなれしやとをはいそく道なれはいとゝ袖はしほれさる道

関路行客といふ事を

宗尊親王

旅人のかよひもしられやすまゆかさりし関の実守

百首哥たてまつりし時

前右大臣

いまもかくさてもやさしゆきひろくかよふさすかの夜半の関

前右近大将頼綱

こやこ舟のよりて行かたなれは

よ人ふつりもしきりかたつりしゆる

前大僧正慈鎮

あふさかの関の名は君をとふこにたとへなりけり

也し

前右近大将頼朝

こやこの守あつまに近くなれハ秋の関ハこえぬとそ思ふ

旅の哥中に　　寂信法師

たひ衣よる月かけに立よりけりなきてもおなしかへるそらかな

了然上人

家ことにけふハくれぬといそくなりまた日もたかき春の夕くれ

藤原重名朝臣

こやこ松ふくかせよりもあき草のまくら結ふ旅の夢かな

藤原有高

ふりぬれは旅の日数もかさなりてけふも草葉の露にぬれつゝ

藤原為道朝臣

あつまちのみちのくにやま月の影のみそのこりてありあけの空

前僧正公朝

たひねするまくらの草のつゆけさにやとかる月もなみたなりけり

為道朝臣

也し

ゆふくれの風やさむきにあきのそらたひねのやとにひとりある身は

平宗宣

題しらす

草まくらむすふたひねのそてのつゆはれぬかきりにいてぬなるかな

平貞時朝臣

旅の宿にてよみ侍りける

夢もまたうつゝのよそにうき秋の袖の露そ置まさりける

人々にすゝめて住吉社によませ侍りける首歌に
旅宿風
前大納言為氏

夏衣かりねのいほはなにはなる難波のあしの葉分の秋風

名所歌よみ侍りけるに真野入江
源親長朝臣

あまのすむ入江の秋の夕くれは月の影のみやとる成けり

旅の紅葉
中務卿宗尊親王

旅枕ゆめもまちしほりかへしつゝ紅葉のにしきを

野中の清水をよみ侍りける
平貞時

見しまゝの野中の清水いかにしてむすふ影こそ恋しかりけれ

題しらす
法印円伊

ふるさとの山の家の秋夜ふけて松の嵐のおとそかなしき

修行し侍りける道にて同行のなくなりけるを
人のあつまりてなくとて
よみ人しらす

とゝめしと思ひしものをたちそひて影のみのこる家

題しらす
藤原景綱

かりそめの家にて見し風の音よりも心すむ秋の夜はそ

百首哥よミてたてまつりし時

入道前太政大臣

きのふまて御祓し袖のうす衣きてのみまさるあきのはつ風

弘安百首哥よミてたてまつりし時

いとふつみちの秋てらてきよ月見をまたせてなかき夜半に

ける

永福門院

藤家の月見よと袖は露もてきてもの思ふ夕暮の

風のおとしのこしにてうきわか身に秋やおもふら

長谷寺より室生へまうてゝ侍る道山路に

ひとりゆく旅のこゝろそきてしのはれん

後京極攝政

みえきてはなれてかくにたつひまもなかりし月の秋の入合の鐘

藤の紙

圓光院入道前関白太政大臣

有明の月のなこりのつきはおもひきやまたかへらん

権大僧都成瑜

いくたひかえたえぬ藤のうらのよのはにやまし

従二位宣子

あきはてゝ秋の心にいまはたゝ里は時雨のいまのゆふくれ

百首哥たてまつりし時

前関白左大臣

押小路

ゆくすゑのちかくはしはしあきのかすさゝはるゝ日数をそまつ

題しらす

了雲法師

こふ家々てしのあ山のあはいゆさえみてはいまもる月影

紀淑文朝臣

ゆきこれくすゑのへふゐらとへはあらしの山の峯月も出るら

大江宗秀

天の戸をかうら雲井にすめる月のなかくにもひかりはさえわたるらん

惟宗忠景

今宵秋霧の世尚をよ月をけふはひとりのひその袖やぬるゝ

百首歌たてまつりし時

従二位宣子

月もなほさびしきふるさとのやとるさとのうへのいにしへのかけ

月前旅といふことをよませ給うける

土御門院御製

さひらけは袂をやつるとも思ふうらあれはすみなれの月

旅の心を

遊義門院

さてひきくましちとおもひれは山ちからもあやこちそみ月をみるらん

源兼氏朝臣

旅ねのくはかよゆめちはたえて月とも都やこの都にゆめ

前参議雅孝家の月の雑歌よみ侍りて

名にたかきにしきかけつくしつるかな

丹波忠守朝臣

時しもあれ望のよ光をそふる月のかけしもこのくれかなしれ

なし

前参議雅孝

清き世も秋わかれの月は今こそ月の光にそみえけれ

前中納言定房家にて時鳥秋月と云題を

とよみ侍りける

左兵衛督清忠朝臣

ぬきつても秋をそかけしのきにあふさかの山のそなたのしらぬ露

秋の名にしほふ月のかけやはしの侍る中山かな

観意法師

吹くる風まも中山の峯に秋風寒く渡る月影

題しらす

前中納言定家

夜半にまた秋ふかし井かたかけの山そなたにかたふきにけん

藤原基朝

暁の関の秋霧立こめてこゝやこゝとそあふさかの山

あけはなれへくさし里まてかすむよみ侍りける

従三位成藤

きよみかた浪のせき守ところとて月のみよをてらさまし

暁旅行を

惟宗光吉

よをこめて山こえかゝる旅人は明の月をも後にもやなるらん

題しらす

中原師員朝臣

たひねのここ山をうつしてて枕にみつる有明乃月

賀茂景久

嵐吹旅ねのひゝきはいはねの枕にさむきここのやま風

洞院摂政家百首歌に

藻壁門院少将

かり枕露にしほるゝ袖のうへにいとゝふかくそこそしみの風

弘安百首歌たてまつりしに

前大納言為氏

月清て秋てゆくらむ夕やみにみちたとるへしをくら山

三十首歌よみてまいりし時

法印定為

あしからの杉むら雲は跡なくていけしにたつるよはの中山

題しらす

平花貞

こしやらて宿とひかぬる夕くれも嵐にさそふいつかしの山

嘉元百首歌たてまつりし時

前大納言有房

あきの葉もとまりかねてや風に散る都のかたにそかへるらん

題しらす

津守国道

たち渡るあさまの山の峯の雲煙にそへてやいとゝかゝらん

大江廣房

日来は遠も舟くらへて雲をそへてやあかす外山

源邦長朝臣

秋風も身にしみゝ吹きて又こゑきく白川の関

嘉元百首奉りし時旅

贈従位為子

此人は夜をこめてやなく夜深き衣の関のけさの秋のわかれ

霧中旅行といふ事をよませ給ひける

今上御製

雲の外にむかひし大江を駒の足音にゆふくれの谷の鳥の声

後京極摂政家百首歌合に関路暁

前中納言定家

雲のゆくすゑの関屋の板ひさし明ぬる月もひかりさひしも

大江頼重にしらせ侍りけるにつかはしける

法眼慶融

言の葉たえぬ行く村雲にうそきえぬ月の影ぞかはらぬ

大江頼重

こゝや又むかしの関の明かた見えてしらぬ雲の路を行くへ(?)見えさき

法眼能因

うら遠やまけきさこしや人のよひの衣をとけて雲のうちまて

寂恵法師

梅か枝の花よりほかに残るかはかれきの枝の白雪

あつまへくたりて侍りけるとしのくれに申つかはし

かへりてよみ侍りける

祝部成茂

あはれなるこゝろしらぬにたちそめてやまのかひよりたちかへりぬる

前大納言為氏あつまへくたりて侍りけるに

つかはしける

源親行

ゆくさきの風のひの森の哥てまみさやさんかひとれ也

也し

前大納言為氏

ゆくすゑもひさしかるへき藤なみのかけにそたのむなかき世まてと

おもひしらん

前中納言為相

あつまちのおなしひとよのかけにもそなへ

前中納言経継

くもゐにひかりもそはなきみのはるのこゝろのすゑのちよまて

土御門院小宰相

いくよのかさしもあれはかたのうきよのはまの松の嵐そ

家百首哥中に

後京極摂政前太政大臣

古郷はたゞ夢路にかよふ嵐の音とはきこえけん
百首哥めされし時に
後白河御製
色にいでゝ人をうらむる一言もわが身をかこつ
詠のゝちぞ秋もかなしき
よそにのみ聞て過にし秋の山のおくのかれ葉のそよぐ也

續千載和歌集巻第九

神祇哥

建長五年住吉社に御幸侍りける時述懐と
いふ事を講せられ侍りけるによませ給ける

後嵯峨院御製

おもふ事神代よりいますみよしの松に千とせをこたへなりとも

太宰権帥為経

いく代経しかきりもしらぬ末なれはちきりける住吉の松

前右兵衛督為藤

すなほなるやまとの言の葉をまつそてこそ神もうけまつせの種いまも見え

弘安八年住吉に御幸侍りけるに歌を読侍
られ侍りけるに

山本入道前太政大臣

あきらけき代のためしもこゆるかなすみよしの神もうけひくらん

住吉社に圓年大覚寺院の御巻数そへてまゐる
とて松枝に付て給はれけるとて女房にかはりて

常盤井入道前太政大臣

千とせへんためしなるへし言の葉をもしけみやすめる住吉の松

住吉の社にまうてありて寄神祇祝といふ
事をよみ侍りける時

権中納言為藤

住吉の松も花咲御世にあひて十かへりまもれ和哥の浦のみち

千秋くまてあひて君をいのりこそする

津守経国

さしのほるあさひのかけもいかならん入江の月を

皇太后宮大夫俊成

ながめつつみきはの風の吹まよふ月

題しらす

文覚法師

立かへりみやこに見ゆるあさひのかけにうつる月

津守国道

神かきの松のみとりもかはらすに千世まてかけていのる心

玉津嶋に詣ててよみ侍ける

前大納言為家

みなかみのきよき流をうけつきてわかの浦わにたえすかよはむ

源兼氏朝臣住吉の社にて十首歌よみ侍けるに

前大納言為氏

和哥の浦にたえぬなかれの末とてもなほ行末をまもれ住吉

前関白太政大臣家歌合に

題しらす

いかにせむ住吉の神のよにたえす和歌の浦波かけてみるらし

津守国助

わか浦にたちしなひのかけつくしてもなほつきせぬ和歌の道

入道前太政大臣家十首哥よみ侍しに述懐

ひとかたにたのむもいかゞたのまれん神も哀を我身わすれは

春日社にてよみ侍りける哥の中に

前大納言為氏

むかしよりまもりのかはらぬ神もなを春日の影はさしてたのまん

前関白太政大臣春日社にて侍りける時

山階寺の別当にて代々の跡をつぐことをおもひて詠侍る

前僧正實聡

みかさ山老木も今は花さきて代々にかはらぬ色をあらはす

題しらず

前参議雅有

見るさ山さしてそ風のかよふらし神もいかなる松やまもらん

春日社百首哥よみてまつりし内山

一条内大臣

たちはなれ山はみかさの影もなく月もかはらぬやとりなりけり

西行法師すゝめて百首哥よませ侍りける

前中納言定家

かくてこそいまはみかさの山さしてかはらぬ神もたのまるれ

みかさ月のかゞみ春日社にまゐりて侍りける

哥の中に

常盤井入道前太政大臣

青山のなかに春草のさかりこそ春の錦か

神祇の心をよませ給うける

後二条院御製

今よりはおほくれし之青山にちよもみるべき春の月

前中納言定資

風なきを述懐せて青山のさかへかはらぬ神垣の色

題しらず

中臣祐茂

手向山みやゐの神のまもるしるしにや月になりける

前信正實聰

さしのぼる朝日のかげにて清き見るきよき瀧の御前

後京極摂政前太政大臣

おほかたの春の神やしろみもすそのやよろづよを

君にぞ神のまもりてのちかひ

中臣祐春

代々をへて神よりつたふる道をまもりてと君を守らん

題しらず

猶秀房

二葉より神やこそたのむ小塩山まれあひそめし松の千年まで

まつよひとつりてはるかに無量代をちぎりて

かりのここちこそ神代

権大納言公順

思ふ事なくてや見まし川の瀬のかけにうつるは世の中のうき流

題しらす　　　　前大僧正禅助

今もなほあさくらやまのしけみや青の神のゐまし

法皇御製

おく山のふもとのみちもふりうつみあまの原みえしとふかくかへん

二品法親王家五十首歌に松雪

前中納言経継

冬されはみねの松かえ雪ふかくこほりとちたる嵐のこゑそ吹

弘安百首歌たてまつりける時

入道前太政大臣

雪はれてみねの松村枝にかくれし冬の神のこゑはみえたれ

光明峯寺入道前摂政太政大臣

家の百首歌よみ侍りける時

従二位家隆

草枕かりねのとこのしろたへの袖にかけてなみたとそなる

題しらす

法性寺入道前関白太政大臣

神かきやこしちの山の時雨ときこえし松の音そきこゆる

みやまちの月をさすてゆくかたの人のおもかけ

祐子内親王家紀伊

しらさりしくものかよひちそれかあらぬ方の川かき

出家をはなりて前大納言資季のもとへ
つかはして　　従三位氏久

きみのみやよのうきよもいとはるゝ山の松風のおと

返し　　前大納言資季

そむく世のうきにてへたてんちかきやまのおくの松風をきく心

述懐を　　権僧正頼守

かりそめにおもひはなれて世すてゝもちゝや母のめくみをおもひはなれぬ

前大僧正仁澄

さきたちのかみのみかけはかはらしなこのよもいつのまつにつけけれ

日吉社へたてまつりける百首哥に

前大僧正慈鎮

さりともと照す日よしをたのむかなよろつのことのなかにすむ人

神恩のあまねきことをおもひてよみける

法眼定誉

おさまれるみよなるかみのしるしとて世のやまもとにてらす日の光

法華のこゝろをよみ侍りける

天台座主慈勝

まことにはあかぬ月のうちにこそすむなりけれ七の社は

百首哥たてまつりし時

前大納言為世

みちのくの七の社の秋くさはかへのかたにおまへかれ

題しらす　　祝部行氏

いにしへの神のみことをひきかけしことしも露やうすくみえなん　　法眼慶宗

三輪の山のみをかけて神さひにのほりゆく松のしるしも　　後遍信関白前右大臣

あきらけき代々のしるしにいふことを神のめくみにかなふなる

百首歌たてまつりし時　　前関白右大臣

ちはやふる神代のむかしもかはらぬ風のふきそひにけり　　押紙

寄国祝といふ心をよませ給うける　　法皇御製

かくしつゝ連日の国をまもる神のみちこそ国をゆたかに

百首歌たてまつりし時

我国は内外の神をまもられてつきぬあまつ日つきをそ　　法皇

嘉元百首歌たてまつりし時　　前右大臣

世をまもる神の恵みをあふきてもみもすそ川やたえすなかれん

河月といふ事を　　伏見院御製

いそ川たえぬなかれのそこきよき神代のかはらぬ月影

恵助法親王

よむ月のかけをそへていさゝ川みなそこすみて浪のうへ哉
大井河氷にとちてみえ給ふ

法印寂信

いすゞ川きよきなかれの神かきに千代の月かけすみやけり
影しらん

度会行忠

さかき葉や月のみちやの神のみとりつくへて千代の光を

荒木田氏忠

神路山けふのくもりもはれわたりそなへたるみよのかけきよみ
伊勢国へまかりて給ひけるをへいゆふたちけるに

ゆふしてへ給ひける時ゆふまつりたりける

民部卿資宣

法眼源承

いせの海やよせくる浪のかみかせにみちのへのさくら

大江貞重

おもふことわすれていのる水神に神のめくみを祈る哉

石清水の社の時参を

前大納言師重

九重のそのにさける花桜もちりて風さへいとはれし

神祇の御歌

後二条院御製

世のためしまつるも御世とこし山ちよの国のさかへ
百首歌よみける次

法皇御製

よろつ代を我君のためいのりおきしきよきなかれのすゑもたえせし

嘉元二年伏見院廿首歌にてまつりし時
寄神楽

前大納言為世

あけかたのしらつゆさえてゆふしてもかくらのこゑにかせそふくなる

文保二年女御入内屏風に内侍所御神楽
儀式ある所

前中納言定家

霜さえてまた夜ふかきに明かたのにはひのかけにうたふ雲井の人

天仁元年鳥羽院の大嘗会の悠紀方
神楽歌音高山をよめる

前中納言匡房

よろつ代をかさねてとよむ山の神榊葉風にうたふこゑかな

康治元年近衛院の御時大嘗会悠紀方
神楽歌三上山をよめる

左京大夫顕輔

ちはやふるみかみの山の榊葉はさかえそまさるすゑの世まてに

延慶二年新院御時大嘗会悠紀方神
楽歌石戸山をよめる

前大納言俊光

冬こ夜すしの空く風山のくまさこそやとられて出月影

續千載和歌集巻第十

釈教歌

菩提心論曰く漸加至十五日名満無号乃
心をよませ給ける

法皇御製

思ひみよ新にはれと出る月はひかりそうすみ給なる

三摩地現前

月の輪をかけてみん雲もなき新にそさやけし

十住心論の開門庫授寶とよみ侍ると

さとりゆく十の心のひらけてそかつひのまことにあへるなる

真如親王をとつかはしける事を

弘法大師

かくらはや達磨と志れる君なれは後の信をそいはかなり

観音院にてよみ侍ける

権僧正智弁

観念の外なれは山をも常楽我浄とそ定極主

志賀上にて波の花はちる浪なりけり

大僧正明尊

志賀の若空上我といふ心をよみ侍ける

如秋八月霧微細清浄光の心をよみ侍ける

前大僧正實兼

さりともな光をたのむ月影はへたつる雲もさはりともなし

妙観察智の心を　法印守禅

曇らねく有明の山のはの月の影もきえ[illegible]月の影は

然此月證三菩提出過一切心地と

前大僧正公澄

みな月の空にはたゝくはまつ雲も曇もなからんへこそけれ

大日経成就悉地不始妙覚浄円鏡常現前

了然上人

かりそめにいてしとゝへそなるひかりそみゆくあかりなり

鳥羽院御時にはして物のみちをと詠して参り

[illegible]

覚鑁上人

まれ鏡うつしをこゝろの姿をは海まれにこゝろの仏とそ見る

御返し

鳥羽院御製

そのかみの仏もわか心みれはわれの心にあらし

真言院の花を詠して

法皇御製

三会の夜にこゝのへさことにもちらさて咲る色

御返し

前大僧正禅助

この世にちりもひらきし九重の花の色をは見そ見るへき

有空不二の心を　法印道我

ゆきかへりいつく今さらに迷ふらん法のちまたはひとつなれとも

法花経序品照于東方を　入道親王尊円

春風のこゑをそへして法の花ちらすのみかは世にそちりける

我見燈明仏本光瑞如此　源之長朝臣

ひかりさすむかしのかけも今こそはけふの法の花そさくらん

方便品断々積功徳　法眼親瑜

すゑ深き流もふかくおもひしりて花のみのなはいつ

世の同しく法花経をよみかさてまつるへくの

心をみかく表紙の絵をかきそへに二の巻

の心を　前中納言定家

なかれ法の明ゆくむしさ花のけはひを見ぬは心の空

譬喩品　近衛院御製

いかに三の車のけつるに思ひの家をいてしとそ見る

信解品如童子幼稚無識の心を　法印定為

あはてしそさらにしらぬ子のいとけなかりし親のことを

薬草喩品　　僧都源信

ひかりにはおもひわかれぬひかりこそ三草二木はしけりけれ

待賢門院中納言へくもたえぬわかくさの花

経大八木よりもさかえぬ　授記品於未来

世咸得成佛のみちとたのむはかなさ

皇太后宮大夫俊成

いつれともわかぬやまのはにまたれつるありあけの月をまつほかそなき

安楽行品深入禅定見十方佛

ふかきやまにふかくいりぬるひとのみそよもの月をもみるへかりける

涌出品従地而涌出

よのなかにのこるちりけるきしのうへのみちもうれしき山川の水

観無量寿経王宮会の心を

円胤上人

ふかきやまにのこるはなもちりにけりさそふ風にもさきそふかけ

日想観応当専心繋念一処

照空上人

入日をうつりにしみちをたてゝすちにいくとせかみすれみくらき

後鳥羽院下野もとめて侍りける十六想観の

哥に水想観を　前大納言為家

そこきよきちりもとむすひすみわたる水の面にくもりなきかな

光明遍照十方世界といふ心を

源空上人

月かけのいたらぬ里はなけれともなかむる人の心にそすむ

下品下生の心をよみ侍りける

蓮生法師

居なからも喜ひの月はあらはれてすゝむなる

仏開示始知方便之意

順空上人

今こそはしらめ海の山桜ひらくは今そ花とさくなる

阿弥陀経常作天楽の心を

俊頼朝臣

あまの原のよなかはうかふたなひく雲に風やなからん

往生論永離身心悩

今はしも九の品の花のみは蓮の台なりけり

法印下座光親法印の許へ銀にてつくれる念珠と水精の念珠をときてつかはしける

前権僧正成賢

極楽のちかひをのちにゆくそかすを我身の玉とてしらせまし也

法印良覚

さとりゆく心の玉のひかりにてにこれる世のやみをてらせとそ思ふ

真言の要文おさめききてのち詞はきこしめ
からしてかいよふうきよしよて侍る修人のもとへ
り

前大僧正道寶

ありしよりひかりそそふる法の水そのなかれにはいさきよし

前大納言公澄

苔川のそこひとなれとよみて
侍りける伝法の流そ出あひぬる

権僧正桓守

むかし年の苔の下きよ絲苔川のなかれたえすそにこ結
代々の流をよそそへるとも思ふへくもなかる

権大僧正澄俊

妙なる法の庭にちるときの花の色そすゝしき

円宗寺法花会おこなはれけるにまいり
て當座にてよみ侍りける

権律師定海

呉竹や庭の白雲たなひきて道のちりをやはらくる

題しらす

前大僧正禅助

移りゆく代々の法のみなもとにくもらぬ月そ残れる

百首歌よみ侍りけるに

法印覚叡

鳥の音にさそはれてこそ法の声もきこえけれ

嘉元百首哥たてまつりし時　山

前大僧正道玄

秋山の千本をかさねりて千秋はこの家なりけり

久安百首哥よみてたてまつりける時

待賢門院堀河

かくきよき海のきさらの風やまれし月のかけとよみけるかな

釋教哥とて

法務公紹

西よりや風のつてをうけきてもかの月を頼むつかひそ

人の法文をかりけるに給はせて申すとて

法印成運

みのりのみ光る月をこそそてにやとしてきよりゆかし

題しらす

従三位道子

世にやとる水のかけさへ夜をこめてやゝはれ家月のかけにそありける

皇后宮

越つくるひかりもよそに見えてこもるあまてる月の家にそたつ

宰相典侍

西よりさしやうちもかはしかかへぬさえかの月のありかなれ

遊義門院

あまりの法のみちある世問しまもりそあまる海にかすはら

前大僧正親源

さりあま葉てられしもかゝりの車にのせてなせよ

日吉社にたてまつりける百首歌に

前大僧正慈鎮

誰人もみちにまよはぬ心かな我やとゝしへ人のおもはん

百首歌たてまつりしついでに

後宇多院御製

冬の夜のさえて月日のかゝるにも雨もひとてしぐるゝぬれ

春日社にてよみ侍りける

前大僧正範憲

やはらぐるひかりをみてそ春日のゝかみよりもなほたのもしき

題しらず

前大僧正良信

わきて思ふこゝろの光つきなくはうき世のやみにわれやまよはん

永福門院

さくら咲く海にうかぶ光たゞ月の影をうつしてそ見る

弘安百首歌たてまつりける時

入道前太政大臣

尋ねみちよそに思ひわくらん海の外と内ぞと知人のなき

尊覚法親王

思ひきやたゞひとりのみちにきて海よのみちにまよふらん

前大僧正禅助

ゆく人こそみちも絶にけれはまことのはていつくゆくらん

法印俊誉

さはれたからゆかてこそゆかぬゆゑにみちはしるへき

嘉元百首歌たてまつりし時　釈教

民部卿實教

義照もひかりも人をわすれて釈迦にあふへき法のみちしる火
影しらん

前大僧正慈源

明暮も法のみちしる後の世の風にまよふ人ゆかれ

前大僧正範憲

いりてこそ見えし人もしらす十重の消ひとする法の外

僧正覚円

きしかたに法の折みちをひらくかな心へ人のみちそしるさき

弘安元年百首歌たてまつりし時

入道二品親王性助

きしかたに法のみちしるへしてそ霊鷲の山の月をまつらん

正和二年法皇霊鷲山の御筆御経を
の折にて山の法を御供養せられけり
しるしはありとつけ侍る

僧正道順

霊鷲山はゆきて見ぬはあはれとも佛の今そみて侍る

いかなりしみのりなりけんつゆしつくらむ

覚鑁上人母

そこきよき心の水のすむ時ハあまりてまかせへそ空もさし

覚鑁上人

ゆりつかるへのをしへのそれも西のかたへれまにさそはれし
ひえの山をいそく浄土の門としりなる(?)なれ

證空上人

をしへしく

なにとなく山のはにかたふきし西にもとさるへき秋の夜の月

歓空上人

影しらは

このところもいつく月ならぬ心のまゝに西をしのふなるハ

来迎のまよひをとかくしらんかたき

如元上人

待人のまつまほしきもいよゝたのしみの心の

影しらん

権律師永観

ありかたくめくるもきくもちかひなるにたのむかなえの

千観法師

極楽のみちのはしめにすゝむれはよそにはいはしはしめとそ思

百首歌よみ侍りし時

入道前太政大臣

むらさきの雲にもかねしやとりの影そあかなる

堀川左大臣雲居寺にまうでて哥よみ侍りけるに

菅原在良朝臣

紫の雲井を頼みて来つれはわれは頼みてひとへを契るへき
この舟の席室の月人て蓮花のうへにもとまりて

二品法親王覚法

蓮の花残りの雲のまかふれは色もさけくにまさる紫の

覚性親王観音を紫雲にのせたまへり
てその絵讃しるし侍へきよし仰つかはし侍りけれは
よみ侍りけるによみて侍る

基俊

紫の雲のなかゐる山のはに色付月やさしのほるらん
也

入道二品親王覚性

名もよはふ色月は紫の雲とともにふかきかな

題しらす

前大僧正道玄

ひろまりし三国をへてそつたへける
法そこれよのまもりなりける

續千載和歌集

和
28
廿二 全

特別
イ4
3163
16(1-2)